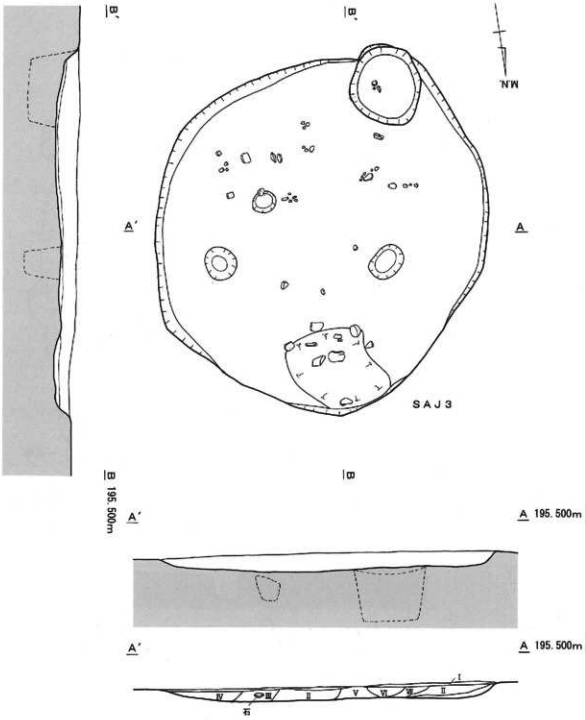
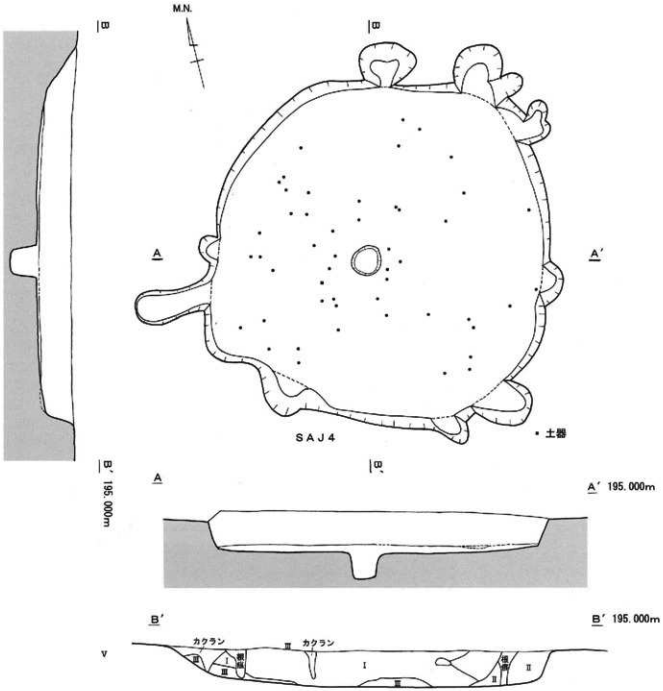


【土層注記】ＳＡＪ３

Ⅰ　黒褐色（7.5YＲ３／１）御池ボラを微量に含む。ややしまっている。
Ⅱ　暗褐色（7.5YＲ３／１）直径２～３mmの御池ボラが多く混在する。ややしまっている。
Ⅲ　暗褐色（7.5YＲ４／３）直径５mmの御池ボラを少し含む。しまりが弱く、粘性あり。
Ⅳ　褐　色（7.5YＲ４／３）直径１～３mmの御池ボラを多量に含む。しまりが弱く、粘性あり。
Ⅴ　褐　色（7.5YＲ４／４）直径１～５mmの御池ボラを多量に含む。ややしまり、粘性がある。
Ⅵ　褐　色（7.5YＲ４／６）御池ボラを多量に含む。
Ⅶ　にぶい褐色（7.5YＲ７／４）御池ボラを少量含む。ややしまりがある。

0　1m

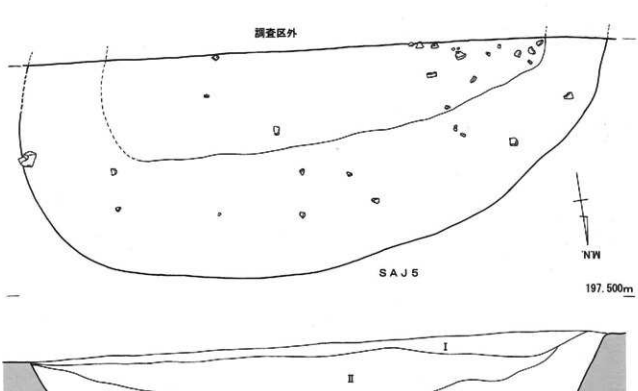
第６図　野添遺跡　３号竪穴住居跡実測図（ＳＡＪ３：１／30）



【土層注記】ＳＡＪ４
Ⅰ　暗褐色（7.5ＹＲ３／４）御池ボラ（黄橙粒子10ＹＲ７／８）が混入し、炭化物を含む。
Ⅱ　褐　色（7.5ＹＲ４／６）御池ボラ（黄橙粒子10ＹＲ７／８）が混入し、炭化物を含む。Ⅰより若干硬め。
Ⅲ　暗褐色（7.5ＹＲ３／４）黄褐色（10ＹＲ５／６）ブロック、御池ボラ粒子を多く含む。

0　1m

第７図　野添遺跡　４号竪穴住居跡実測図（ＳＡＪ４：１／30）



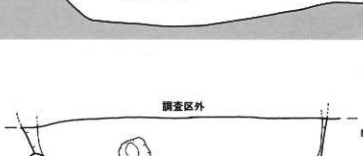
【土層注記】SAJ5

I　黒　色（10YR2／1）御池ボラ（黄橙色粒子）を少量含む。しまりがなく、粘性ややあり。

II　褐　色（10YR4／4）御池ボラ（黄橙色粒子）を少量含む。しまりがあり、粘性強い。

III　暗褐色（10YR2／3）御池ボラ（黄橙色粒子）を多量に含む。しまりがあり、粘性強い。

IV　暗褐色（10YR3／4）御池ボラ（黄橙色粒子）を多量に含む。粒子も大きく（1～20mm）しまりがあり、粘性強い。



【土層注記】SAJ5

I　にぶい褐色（10YR5／4）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～2mmを30%程度含む。しまりがあり、粘性ややあり。

II　褐　色（10YR4／6）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～5mmを5%程度含む。しまりがあり、粘性強い。

III　褐　色（10YR4／4）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～2mmを5%程度含む。しまりがあり、粘性弱い。

IV　褐　色（10YR4／6）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。

V　暗褐色（10YR3／4）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。

VI　暗褐色（10YR3／3）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。

VII　黄褐色（10YR6／8）1～10mmの黄橙色粒子（御池ボラ）のみで構成。しまりがあり、粘性なし。

第8図　野添遺跡　5号・6号竪穴住居跡実測図（SAJ5・SAJ6：1／60）

７号竪穴住居跡（ＳＡＪ７：第10図）

Ｂ区の北寄りの御池ボラ上面で、Ｃ５グリットから検出された。円形プランの住居跡でＳＡＫ２とＳＤＫ１に切られている。ＳＡＫ２と同時代のＳＡＫ３となる可能性も考えられたが、断面の土層観察によって切り合い関係が確認できたので、別遺構と認定した。南北方向約４ｍ、東西方向約4.2ｍと推測され、検出面からの深さ６～15cmを測る。なお明らかな主柱穴は検出できなかったが、床面南側に径18～22cm、深さ22～57cmのピット５基を配する。床面中央から南側に向けては、長軸137cm、短軸125cm、深さ約30cmの土坑状の落ち込みが検出された。覆土は黒色土と御池ボラ粒を含む暗褐色土でその構造から炉跡と推定されたが、炭化物・焼土等は見られなかった。住居の埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

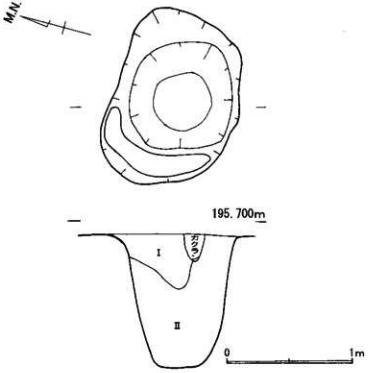
出土遺物は第19図に示している。この住居に伴う遺物は（65～68）は主にド層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、65・67は、口縁部がやや外反する粗製の深鉢で、口縁部に幅広の粘土帯を貼付け、断面は三角形に近い状態になる。内外面とも横方向のナデである。66は口縁肥厚部に２条の浅い凹線文を施す深鉢で、風化が著しいが内外面とも横方向のナデである。68は組織痕土器の胴部片である。内面はナデ調整である。

(2) 土坑

１号土坑（ＳＣＪ１：第９図）

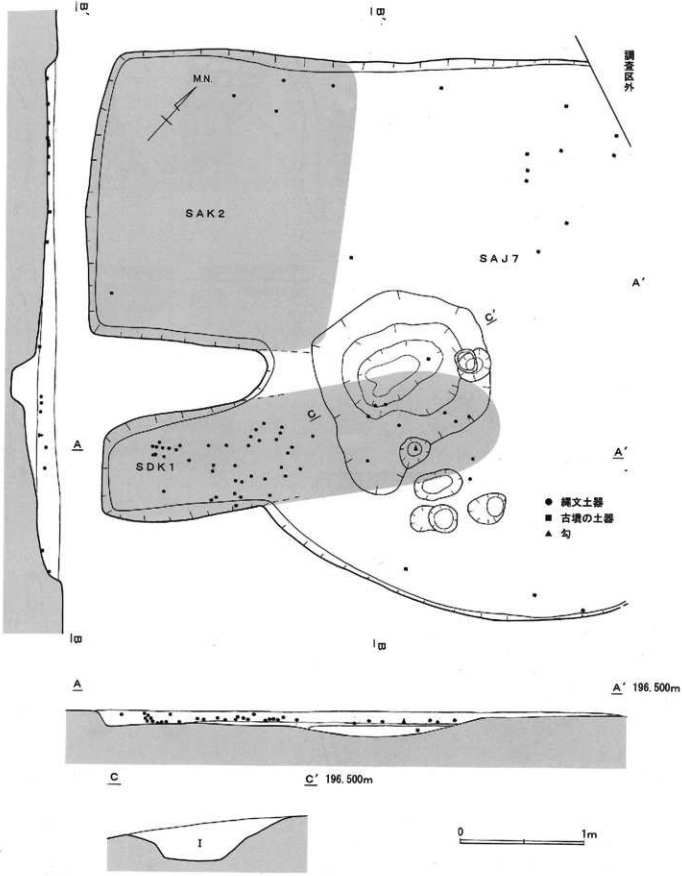
Ｂ区やや北寄りの標高約195.50ｍ付近、Ｃ５グリッドから検出された。周辺には東約１ｍに６号竪穴住居跡が存在し、南東約1.5ｍには５号竪穴住居跡が存在する。規模は長径約140cm、短径約102cmを測り、平面形態はやや不整の楕円形で断面形態は椀状を呈する。埋土は基本土層Ⅱ・Ⅳ層を主体とし、炭化物粒子を微量に含む。出土遺物は題19図に示している。

69は無文の深鉢の胴部片である。器面調整は外面はミガキを施し、一部指おさえがみられる。内面はミガキ、ナデが施され、一部指おさえ、黒斑がみられる。



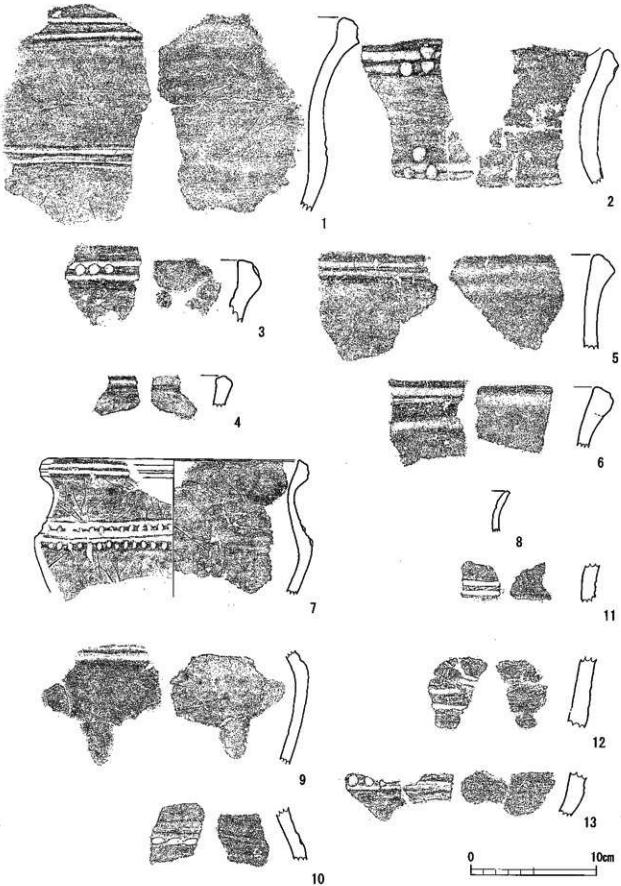
【土層注記】ＳＣＪ１
Ⅰ　暗褐色（10ＹＲ３／４）御池ボラ（黄橙色粒子）直径１～２mmを含む。炭化物混入。しまりがあり、粘性ややあり。
Ⅱ　暗褐色（10ＹＲ３／４）御池ボラ（黄橙色粒子）直径１～５mmを含む。硬質で、炭化物が混入する。

第９図　野添遺跡　Ｊ１号土坑実測図（１／30）

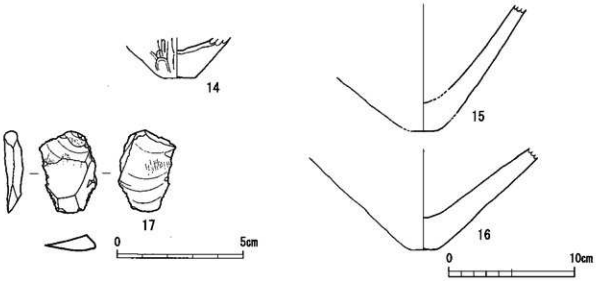


【土層注記】
I　暗褐色（7.5YR3／4）黒色土と黄橙色粒子が混在する。

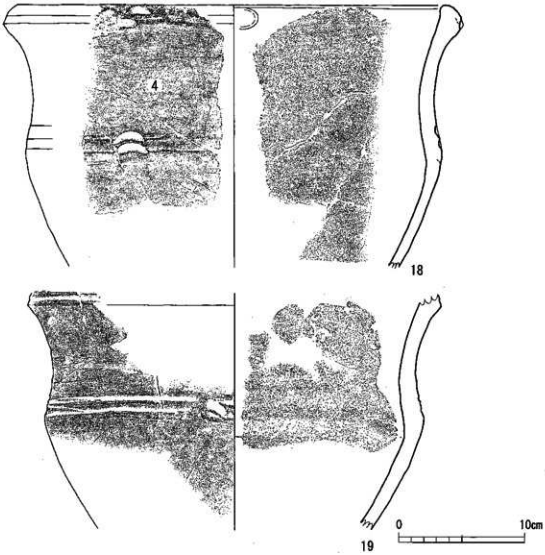
第10図　野添遺跡　J7号竪穴住居跡・K2号竪穴住居跡・K1号土壙墓実測図（1／60）



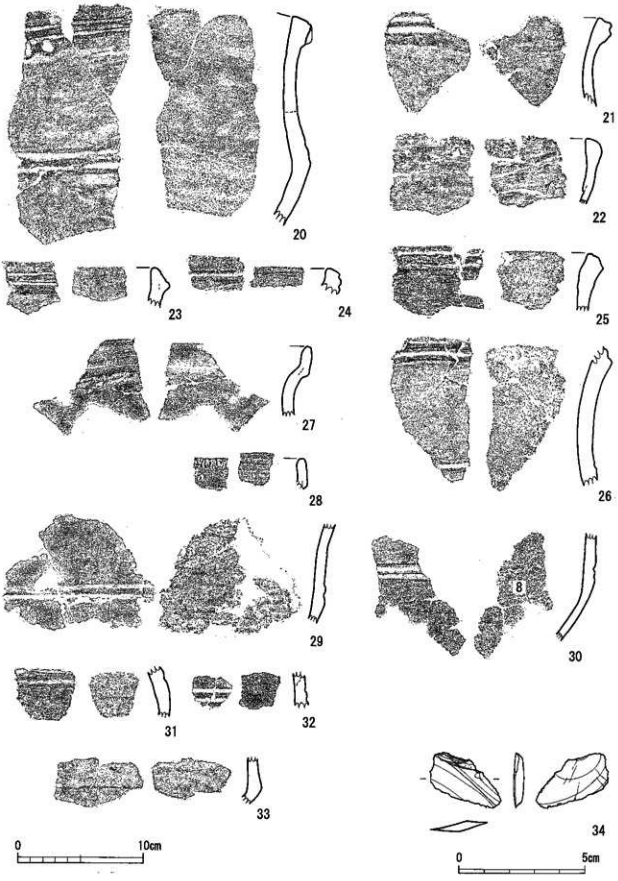
第11図　野添遺跡　Ｊ１号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)（１／３）



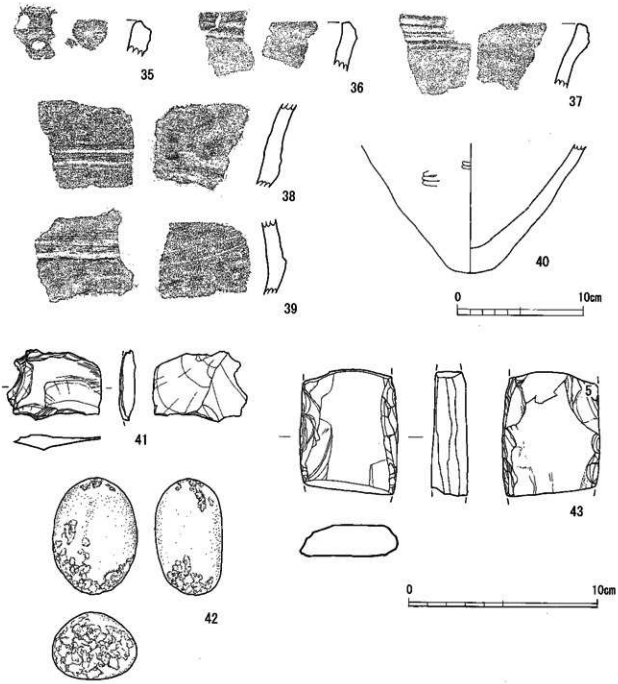
第12図　野添遺跡　Ｊ１号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)（１／３）（17…１／２）



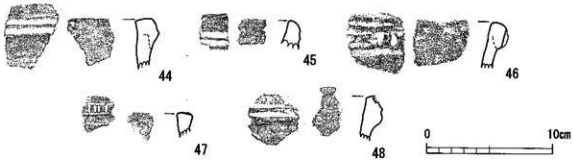
第13図　野添遺跡　Ｊ２号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)（１／３）



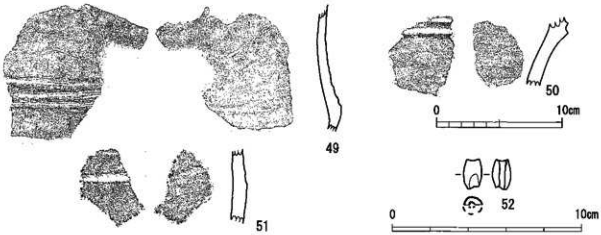
第14図　野添遺跡　Ｊ２号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)（１／３）（34…１／２）



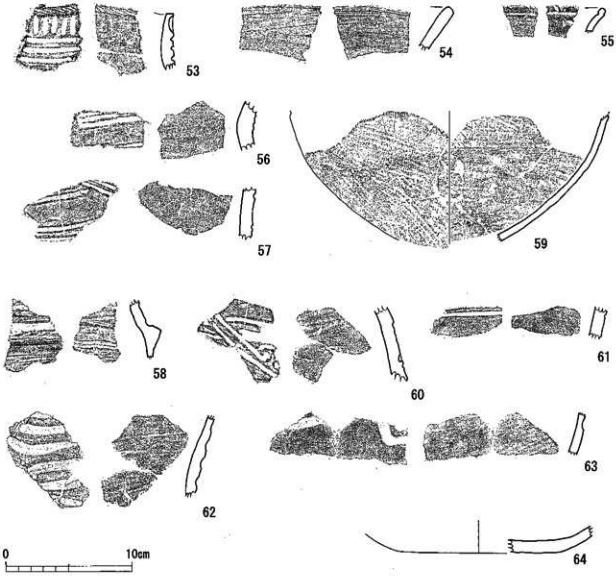
第15図　野添遺跡　Ｊ３号竪穴住居跡出土遺物実測図（１／３）（41～43…１／２）



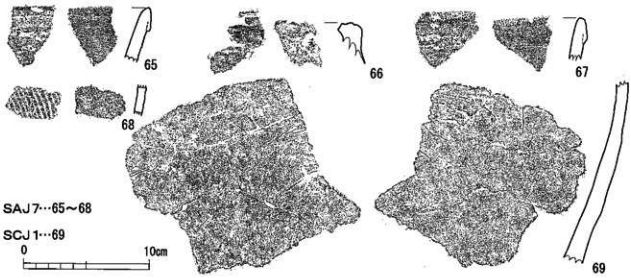
第16図　野添遺跡　Ｊ４号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)（１／３）



第17図　野添遺跡　Ｊ４号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)（１／３）（52…１／２）



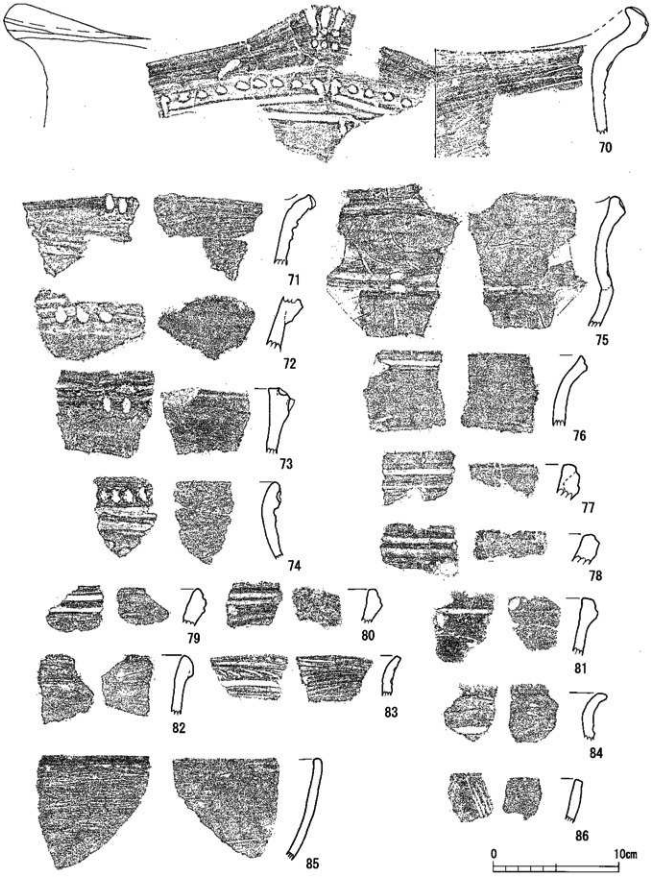
第18図　野添遺跡　Ｊ５号竪穴住居跡出土遺物実測図（１／３）



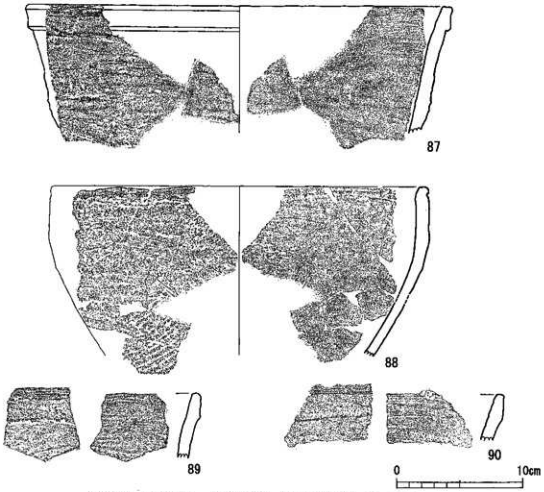
第19図　野添遺跡　Ｊ７号竪穴住居跡・Ｊ１号土坑出土遺物実測図（１／３）

(3) 包含層出土の遺物

縄文時代の土器の遺物包含層はＢ区・Ｃ区の第Ⅳ層である。この第Ⅳからは縄文後期・晩期の土器が全体的に集中した出土状況であった。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第20図～第21図に示している。70は口縁部がやや外反する深鉢で、口縁端部を肥厚させ、その波頂部には棒状工具による３本の押圧刻み、上下２段の刺突文を施す。口縁形態は波状口縁が認められ、頸部には連続刺突文と端部を鉤状に曲げた２条の沈線文を組み合わせた文様が施される。外面は横方向のナデ、内面は不定方向の貝殻条痕文を施している。71は70と同じく口縁部が外反する深鉢で、波状口縁を呈する。波頂部には棒状工具により３本の押圧刻みを施す。頸部には連続刺突文はないが、70同様２条の直線文と斜線文の一部が見られる。外面は粗いナデで、内面はナデである。72は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、先端が欠損している。口縁端部は肥厚し凹線を２条と３個の凹点文が施されている。内外面ともナデ調整で、内面には指頭痕がみられる。73も同様の器形で、口縁部を肥厚させ２条の凹線文と上段に１個、下段に３個の凹点文あるいは押圧刻みを施している。内外面ともナデ調整である。74は口縁部が外反する深鉢形土器で端部に貝殻腹縁による縦位の連続刺突文を巡らし、その下に凹線文による２条の直線文と一部曲線文が施されている。内外面とも横方向のナデである。75は胴部は張り出す小型の深鉢で、口縁部に浅い凹線文を１条、波頂部に凹点文を１個、同じく胴部屈曲部に２条の凹線文と上下２段の凹点文を施している。外面はナデ、内面もナデである。76は胴部があまり張らずにそのまま緩やかに外反する深鉢と考えられ、断面三角形に肥厚する口縁部に１条の波線文を施している。内外面ともナデ調整である。77～81は75同様の器形を有すると考えられる深鉢で、凹線文を口縁部に81は１条、77～80は２条巡らせている。内外面ともナデ調整である。82は口縁部が外反しながら立ち上がり肥厚する深鉢で、肥厚部は無文である。外面はナデ、内面はミガキである。83は外反する口縁部に斜位の貝殻腹縁による連続刺突文とその下に端部に刺突のある２条の太めの沈線文、その間に横位の貝殻腹縁刺突文が施されている。調整は内外面とも貝殻条痕文である。84は口縁部が大きく外反する深鉢で、口縁部直下に太い沈線文を２条施している。器面はナデ調整が認められる。85は鉢形土器、86は深鉢形土器で口縁部はやや内湾している。85は外面は板状工具による粗いナデでススが付着し、内面は板状工具によるナデの後、粗いミガキと思われる。86は外面はナデ後対面する２～４条の斜位の沈線文を施し、内面は



第20図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(1)（1／3）

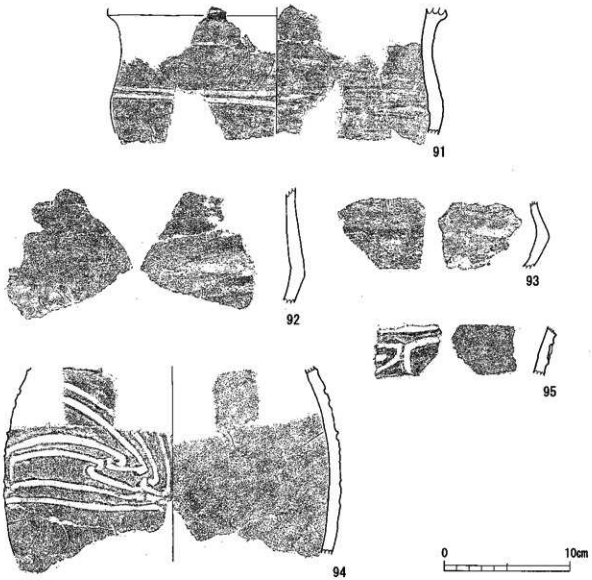


第21図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(2)（1／3）

ナデ調整である。沈線は半截竹管状の工具によるものと考えられる。

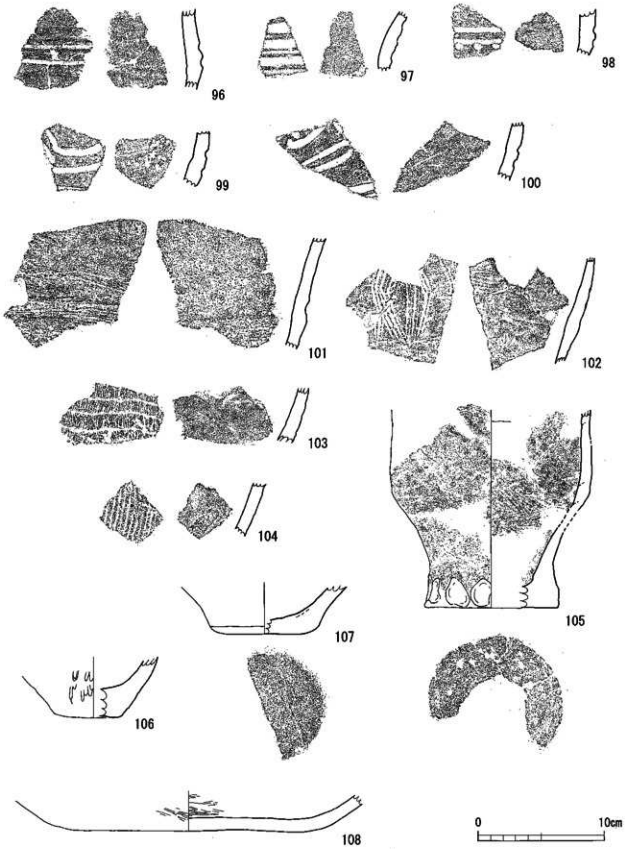
87は口縁端部外面に粘土帯を貼付け、無文の口縁帯を有する粗製鉢形土器である。外面は粗いナデでススが付着している。内面はナデ調整である。88は粗製鉢形の組織痕土器である。外面はナデで、一部ススが付着している。内面はヘラミガキを施している。胴下半部に編布の圧痕が見られる。89は、87と同一個体と考えられる口縁部片である。90も87同様口縁端部外面に粘土帯を貼付け無文の口縁帯を有する。外面はナデ、内面は粗いナデ後丁寧なナデも見られるため85同様鉢形土器であろう。90は一部ススが付着している。

91～104は深鉢の胴部である。91は胴部は張り、口縁部が外反しながら立ち上がる深鉢で、胴部上部に凹線文が２条、口縁部に凹線文が１条巡らされている。内外面ともナデ後粗いミガキ調整である。内面に一部炭化物が付着している。92・93は胴部が屈曲して張り出す深鉢である。92は外面ミガキ、内面は粗いナデを施している。93内外面ともナデ調整である。94は胴部が膨らみ、口縁部が外反すると考えられる深鉢で、頸部から胴上半部にかけて入組文を交えながら２条の平行沈線を施す指宿式土器である。内外面ともナデ調整である。95は太めの沈線文による直線文や曲線文を施す。内外面ともナデである。96・98は胴部があまり張らず、肩部に２条の凹線文を巡らせており、98には凹線文の下に押圧による列点文が見られる。内外面ともナデ調整である。97は、外反する口縁部付近に４条以上の横走凹線文が施される。ナデ調整である。99・100は太めの２平行の沈線文が施されている。内外面ともナデである。101は口縁部が外傾しながら直口すると思われる深鉢で肩部に凹線状の段を有する。外面は条痕の後粗



第22図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(3)（1／3）

いナデを施し、内面はナデを施している。外面に一部ススが付着している。102はわずかに肥厚する口縁帯と考えられる部分に半截竹管状の工具で2平行沈線文による縦位の鋸歯状文を施す土器と考えられる。口縁部端部は恐らく86が同一個体と思われることから内湾気味の直口口縁になると考えられる。いわゆる大平式土器の文様に類似するが、径が小さく残存部位も少ないため不明である。器面調整は全面にナデを施し、丁寧に仕上げている。103・104は組織痕がみられる鉢の胴部片である。器形は底部付近で屈曲し、口縁部に向かって開きぎみに立ち上がるものや内湾しながら直立または開きぎみに立ち上がるもので、底部が丸底もしくは丸底ぎみになるのが一般的である。圧痕は屈曲下や胴下半にみられ、103・104ともに編布圧痕が認められる。内面は丁寧なナデもしくはミガキ調整である。104は内面に一部ススが付着している。105～108は底部である。105は底部が厚底を呈し、胴下半部がやや開きながら胴部中位で直線的に立ち上がる深鉢で、器面調整は内外面ともナデである。内面の一部に貝殻状痕文が残る。106は底部から外傾する胴部が直接立ち上がる深鉢で、外面は粗いミガキを施し、内面は風化しているがミガキと思われる単位が見られる。107は底部から外反しながら開く深鉢で、外面は風化しているがミガキで、内面は風化が著しく調整不明である。108は鉢形土器の底部で、広く大きな底部から口縁部が大きく開く鉢形土器になると思われる。内外面ともミガキを施している。



第23図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(4)（1／3）

第1表　野添遺跡　出土土器察表(1)

遺物番号	被別	出土地点	器種	部位 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
1	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部			ナデ、沈線、一部スス付着	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰白色、茶褐色の砂粒、1mm以下の黒色の光沢粒	一部風化
2	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部～胴部			横方向のミガキ、回点文、波状口縁	横方向のミガキ	褐 黒褐	黒褐 灰黄褐	微細な乳白色の粒、1mm以下の透明な粒	風化
3	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部			ミガキ、回点文	横方向のミガキ	褐 黒褐	にぶい褐	1mm以下の乳白色、透明な光る粒	風化
4	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部			ミガキ、工具による細沈線、スス付着	ミガキ	灰褐	灰褐	3mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の灰色の粒	
5	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部			ナデ、回線文	ナデ、黒変	橙 にぶい橙	橙 黒褐	2mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の褐色透明で柱状の粒、褐色の粒	
6	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部			ナデ、回線文、粘土のつなぎ目	ナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の褐色の粒、2mm以下の無色透明で光沢のある粒	
7	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部～胴部			ミガキ後ナデ、横方向のナデ後連続刺突文、横方向の2条の沈線文	ミガキ後ナデ	明赤褐	明赤褐 黄褐	2mm以下の乳白色、褐色、黒色の粒1mm以下の黒色、無色透明の光沢粒	
8	縄文土器	SAJ1	壺	口縁部			横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ	黄灰 黒	浅黄橙 褐灰	3mm前後の茶褐色の粒	
9	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部			ナデ、回線文、工具痕、スス付着	ナデ	にぶい赤褐 灰黄褐	にぶい赤褐 灰黄褐	2mm以下の灰色の粒、2mm以下の黒色の粒	
10	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部			ナデ、回線文、回線文列	ナデ	にぶい赤褐 灰黄褐	にぶい赤褐 灰黄褐	7mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の灰色半透明の粒、1mm以下の白色の粒微細な黒色の粒	
11	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部			ナデ、沈線文	ナデ	褐灰	黄褐	2mm以下の灰色、淡黄、灰褐色、黒色光沢、透明光沢の砂粒	
12	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部			ミガキ、沈線文	ナデ	褐灰	褐灰	3mm以下の橙、淡黄、灰白色、透明光沢の砂粒	
13	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部			ミガキ、回点文、沈線	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	3mm以下の赤褐、灰、灰白色、黒色の粒	
14	縄文土器	SAJ1	深鉢	底部			ミガキ	ナデ、粘土のつなぎ目	浅黄	にぶい黄橙	2mm以下の黒褐色、茶褐色、乳白色の粒、透明な光沢粒	
15	縄文土器	SAJ1	深鉢	底部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黒褐	1mm以下の白い光沢粒	風化気味
16	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部～底部			工具によるナデ	ナデ、スス付着	にぶい黄橙	浅黄橙 黒褐	1mm～3mmの白い粒、光る粒	
18	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部～胴部			ミガキ、二段の細回線短沉線	ナデ、指圧痕	にぶい黄橙 褐	黒褐 褐	1mm以下の光沢のある透明な粒、白い粒	風化気味
19	縄文土器	SAJ2	深鉢	頸部～胴部			ミガキ、二段の細回線沉線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	最高～3mm大の無色透明な粒、1mm大の黒色鋭角状で角柱状の粒、0.5mm～3mm大の白	
20	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部～胴部			ミガキ後ナデ、回線文、粘土のつなぎ目、スス付着	ナデ、剥離	灰黄褐	褐灰 にぶい橙	3mm以下の褐色、柱状で黒色光沢の粒、2mm以下の無色透明の粒	
21	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			ミガキ後ナデ、横方向の沈線文、回線文	ミガキ後ナデ	明灰黄 黒褐	褐 明灰黄	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒1mm以下の無色透明光沢粒	風化気味
22	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			細いナデ、回線痕、横方向のナデ	横方向のナデ、粘土のつなぎ目	にぶい褐 褐	黒 黒褐	3mm以下の赤褐色、白色、褐色の粒1mm以下の無色透明光沢粒	
23	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			ミガキ、沈線	ミガキ	橙	にぶい橙	2mm以下の白、褐、黒色、透明光沢の砂粒	
24	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			沈線	ミガキ	橙	にぶい褐	2.5mm以下の灰黄褐、黄褐、黒褐色黒色光沢、透明光沢の砂粒	
25	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい赤褐	2mm以下の赤褐、浅黄、灰白、黒色透明光沢の砂粒	風化気味
26	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部			横方向のナデ、横方向の沈線文	ナデ	オリーブ黒	にぶい褐 にぶい黄褐	3mm以下の浅黄色、黒色、白色の粒6mm程の黒褐色の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、無色透明光沢粒	
27	縄文土器	SAJ2	鉢	口縁部～胴部			ミガキ、ナデ、スス付着	ミガキ	にぶい橙	黄褐	2.5mm以下の黄褐、灰白、橙色の砂粒微細な透明光沢粒	
28	縄文土器	SAJ2	鉢	口縁部			細方向のキズ状の条痕ナデ	ミガキ	黒褐 暗オリーブ	黄灰	1.5mm以下の浅黄、褐色、透明光沢の砂粒	
29	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部			ナデ、沈線文	ナデ	黒褐	褐	2mm以下の浅黄の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒	
30	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部			ナデ、回線文	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	2mm以下の浅黄の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、2mm以下の半透明の粒	
31	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部			ナデ、回線文	ナデ	褐灰	にぶい黄橙 灰黄褐	2.5mm以下の白色の粒、1.5mm以下の灰色半透明の粒、微細な黒色の粒	
32	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部			ナデ、回線文	ナデ	灰褐	にぶい黄橙 黒褐	2mm以下の白色の粒、1mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の黒色の粒	
33	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部			ナデ、スス付着	ナデ	褐灰 灰褐	黄褐 暗灰黄	1mm以下の白色の粒、2mm以下の赤褐色の粒、1mm以下の灰色半透明の粒	
35	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部			ナデ、回線文、山線文	ナデ	にぶい褐	褐	2.5mm以下の褐色の粒、2mm以下の柱状で黒色光沢粒、1mm以下の無色透明の粒	
36	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部			ナデ、回線文、スス付着	ナデ	褐	褐灰	2.5mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の無色透明で光沢のある粒	
37	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部			ミガキ後ナデ、工具による沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙 橙	2.5mm以下の黄褐色、赤褐色の粒	
38	縄文土器	SAJ3	深鉢	胴部			ナデ、抉い沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2.5mm以下の灰白、茶褐色の砂粒、無色透明の光沢粒	一部風化
39	縄文土器	SAJ3	深鉢	胴部			ナデ、ミガキ後ナデ	ナデ、工具痕	明赤褐	明赤褐	2mm以下の灰白、灰褐、茶褐色の砂粒	

第２表　野添遺跡　出土土器察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	層種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
40	縄文土器	ＳＡＪ３	深鉢	胴部～底部				指ナデ後工具ナデ・ミガキ、スス付着	ナデ、スス付着	赤褐にぶい褐	灰	2mm以下の灰白、白、透明光沢粒	
44	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	明褐	明褐明黄褐	キラキラ光る黒・白の微細粒	
45	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	口縁部				ナデ、凹点文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の透明の光る粒	黒化
46	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	口縁部				横方向のナデ、２本の凹線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	白い微細粒	
47	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	口縁部				横方向のナデ、工具による刺み目	横方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の褐色、灰白色の粒、1mm以下の透明黒色光沢粒	
48	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	口縁部				横方向のナデ、沈線文	ナデ	黄灰	褐	2mm以下の褐色、黒白色、黒色の粒、1mm以下の透明黒色光沢粒	黒化気味
49	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	胴部				ミガキ、回線文、スス付着	ミガキ	黒	黒	2mm以下の乳白色の粒、微細な光沢粒	
50	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	胴部				ナデ、回線文、スス付着	ナデ	にぶい褐黒褐	褐灰にぶい褐	2mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の白状で黒色光沢粒、1mm以下の黄褐色の粒	
51	縄文土器	ＳＡＪ４	深鉢	胴部				ミガキ後ナデ、回線文	粗いナデ	にぶい黄橙黄橙	橙	3mm以下の乳白色の粒、2.5mm以下の黒色透明の粒、微細なガラス質の光沢のある粒	
53	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	口縁部				ナデ、棒状工具による回点文列文、沈文、斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐橙	にぶい橙にぶい橙	2mm以下の灰色、黄褐色の粒、1.5mm以下の透明光沢の粒	
54	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	口縁部				ナデ	横方向のミガキ	灰黄黄灰	灰黄黄灰	1.5mm以下の灰色の粒	
55	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	口縁部				横方向のミガキ、隆沈線文	横方向のミガキ、沈線文	灰黄褐褐灰	にぶい黄橙褐灰	2mm以下の粒	
56	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	頸部				ナデ、沈線文、スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい褐灰黄褐	1mm以下の褐色の粒、無色透明の細片	
57	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	頸部				ナデ、沈線文	ナデ	にぶい赤褐灰褐	にぶい褐灰黄褐	2.5mm以下の灰色の粒、無色透明の細片	
58	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	胴部				貝殻条痕ナデ、貝殻復縁による連続刺突文沈線文	貝殻条痕文	明赤褐にぶい褐	明赤褐	1mm以下の灰色の粒、1mm以下の透明な光沢粒	
59	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	胴部				縦・斜方向の貝殻条痕文、一部条痕文後ナデ、横方向の貝殻条痕後ナデ、スス付着	横方向の条痕文後ナデ	明褐明黄褐	明黄褐にぶい黄褐	3mm以下の淡黄の粒、微細白半透明な粒	
60	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	胴部				ナデ、棒状工具による沈線文	ナデ、貝殻条痕文後ナデ	明褐黒	褐褐黒	0.2mm以下の淡黄の粒、0.1mm以下の黒色の粒	
61	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	胴部				ナデ、横方向の沈線文刺突文	不定方向のナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の淡黄色、黒色、乳白色の粒、微細な光沢粒	
62	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	貝殻条痕文後ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	微細～2mmの白色の粒、微細な黒色の光沢粒	
63	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	口縁部				ナデ、回線文、スス付着	貝殻条痕後ナデ	にぶい褐	にぶい褐灰褐	2mm以下の灰色の粒、2mm以下の柱状で黒色光沢の粒	
64	縄文土器	ＳＡＪ５	深鉢	底部				ナデ、スス付着	ナデ	にぶい褐	橙	2.5mm以下の半透明光沢粒、灰色の粒、2mm以下の乳白色の粒	
65	縄文土器	ＳＡＪ７	深鉢	口縁部				横方向のナデ、貼付突帯、丁寧なナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白い粒、1mm以下の灰白色の粒	
66	縄文土器	ＳＡＪ７	深鉢	口縁部				横方向のナデ	横方向のナデ	暗褐	にぶい褐	白色の微細粒	黒化
67	縄文土器	ＳＡＪ７	深鉢	口縁部				ナデ、貼付突帯	ナデ	浅黄橙	淡黄橙	微細～1mmの無色透明の鉱物粒、1mm～1.5mmの黒色光沢で角柱状の鉱物粒、2mm以下の岩片	
68	縄文土器	ＳＡＪ７	深鉢	胴部				細縄痕	ナデ	淡黄	浅黄橙	1mm以下の無色透明の鉱物粒、1mm以下の黒色鉱光沢の鉱物粒	
69	縄文土器	ＳＣＪ１	深鉢	胴部				ミガキ、指押え	ミガキ、一部ナデ、黒斑、指押え、粗いナデ	黄灰橙	黄灰橙	3mm以下のにぶい黄橙、黒黄橙、灰白色、透明光沢の砂粒、5mm以下の橙灰黄色粒	
70	縄文土器	Ｂ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定47.2			横方向のナデ、棒状工具による回点文列、回線文、二列の刺突文、回線による相直線文	横方向の不規則な貝殻条文	にぶい褐	灰褐暗褐	白・黒の微細粒	
71	縄文土器	Ｂ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、指頭痕、刺み目	ナデ	にぶい褐褐灰	にぶい褐黒褐	1mm以下の黒色、褐色、乳白色の粒、微細な光沢粒	
72	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、回線文	ナデ、指頭痕	黒	褐	3mm以下の茶色の粒、2mm以下の淡黄の粒、2mm以下の透明光沢粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒	
73	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、回線文、沈線文押圧文	ナデ	にぶい黄褐	黒褐	光沢のある透明の微細粒	
74	縄文土器	Ｂ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、スス付着、連続刺突文、回線文	横方向のナデ	にぶい褐黒褐	にぶい褐灰褐	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	黒化
75	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部				ナデ、回線文、スス付着	丁寧なナデ	灰黄褐	黒褐	光沢のある透明の微細粒	
76	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐オリーブ黒	2mm以下の半透明の光沢粒、1.5mm以下の淡黄の粒	
77	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				回線文	ナデ	黒	黒褐	2mm以下の半透明の光沢粒、1.5mm以下の淡黄の粒	
78	縄文土器	Ｃ区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ	明赤褐黒褐	明赤褐	2mm以下の灰褐、灰白、赤褐色の砂粒	

第３表　野添遺跡　出土土器察表(3)

遺物番号	種別	出土地点	器種	器位	手法・調整・文様ほか (cm) 口径	底部	器高	外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
79	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、２条の沈線文	横方向のナデ	にぶい橙 黒褐	にぶい橙 黒褐	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	
80	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				回線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 褐灰	褐	1mm以下の灰色の粒、1mm以下の無色透明の粒	風化
81	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、押圧文	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白、淡黄、灰、橙色、透明光沢の砂粒	
82	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、肥厚帯、ス又付巻	ミガキ	橙	にぶい橙	微細で光沢のある粒、0.5mm～4.5mm大の砂粒	
83	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				条痕によるナデ、貝殻腹縁連続刺突文	条痕によるナデ	にぶい橙	褐灰	1mm以下の黄褐、灰白、黒色透明光沢の砂粒	
84	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、回線文	ナデ、工具痕	にぶい褐 灰黄褐	褐灰	2.5mm以下の黒色の粒、3mm以下の灰黄褐色の粒	
85	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、ス又付巻	横方向のナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄褐	4mm以下の灰色の粒、2mm以下の橙色の粒、2mm以下の半透明の粒	
86	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ後沈線文、ス又付巻	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	2mm以下の黒褐、黄橙、灰白色、透明光沢、黒色光沢の砂粒	
87	縄文土器	B区：IV層	鉢形土器	口縁部～胴部	推定33.7			粗いナデ、ス又付巻	ナデ	灰黄 黒褐	暗灰黄	2.5mm以下の灰、灰白、淡黄、黒色の粒、微細な透明光沢粒	
88	縄文土器	B区：IV層	鉢形土器	口縁部～胴部				ナデ、ス又付巻、組織痕	ヘラミガキ	浅黄	黄褐	1mm前後の半透明の鉱物粒、1mm以下の白色不透明の鉱物粒	
89	縄文土器	B区：IV層	鉢形土器	口縁部				横方向のナデ、ス又付巻	横方向のナデ	黒	灰黄 黄灰	4mm以下の灰黄の粒、2mm以下の褐色の粒	
90	縄文土器	B区：IV層	鉢形土器	口縁部				横方向のナデ、ス又付巻、隆帯三角形の突帯文	横方向のナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の灰色の粒、2mm以下の灰白色の粒、2mm以下の半透明な粒	
91	縄文土器	C区：IV層	深鉢	頸部～胴部	推定26.4			ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ、一部炭化物付着	黒	にぶい黄褐	2mm以下の褐色、乳白色、黒褐色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	
92	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				ミガキ、ス又付巻	粗いナデ	灰褐	灰黄褐	3mm以下の白、黄褐、灰、黒色、透明光沢の砂粒	
93	縄文土器	B区：IV層	深鉢	頸部～胴部				ナデ、ス又付巻	ナデ、指押え	にぶい褐	暗灰黄	2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒	
94	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文、ス又付巻	ナデ	にぶい橙 褐灰	灰黄褐 褐灰	3mm以下の黒褐色の粒、灰色の粒、2mm以下の無色透明の粒	
95	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ	にぶい橙	橙	微細～1.5mm以下の浅黄色の鉱物粒、半透明のガラス質の破片	
96	縄文土器	C区：IV層	深鉢	胴部				ナデ、回線文	ナデ	褐	にぶい黄褐	3mm以下の茶色の粒、2mm以下の淡黄の粒、2mm以下の半透明な光沢粒	
97	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				ナデ、回線文	ナデ、黒斑	橙	黄橙	2mm以下の淡黄、灰褐、灰白、赤褐色、黒色光沢、透明光沢の砂粒	
98	縄文土器	B区：IV層	浅鉢	胴部				ナデ、平行沈線文	ナデ	にぶい褐	褐灰	2mm以下の白、淡黄、黒色、透明光沢の粒	
99	縄文土器	B区：IV層	浅鉢	胴部				ナデ、平行沈線文	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	5mm赤褐色粒、3mm以下の白、褐灰灰白、灰黄色、黒色光沢の砂粒	
100	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐	にぶい黄橙	1mm以下の白半透明の鉱物粒、1mm以下の砂粒	
101	縄文土器	B区：IV層	深鉢	胴部				朱底後粗いナデ、ス又付巻	ナデ	暗灰黄 橙	灰 にぶい黄橙	4mm以下の灰白、灰、淡黄、茶褐、黒色、透明光沢の砂粒	
102	縄文土器	C区：IV層	深鉢	胴部				ナデ後沈線文	ナデ	にぶい黄橙 褐灰	灰黄褐	1mm以下の橙、にぶい黄、黒色、透明光沢の砂粒	
103	縄文土器	D区：IV層	浅鉢	胴部				組織痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	0.5mm～1mmの白色不透明の粒、1mm前後の無色透明の粒、微細な赤褐色の粒	
104	縄文土器	B区：IV層	浅鉢	胴部				組織痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mmのにぶい黄橙色の粒、1mm前後の無色透明の粒、微細な赤褐色の粒	
105	縄文土器	C区：IV層	深鉢	胴部～底部				ナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	にぶい褐 黄褐	にぶい橙 褐灰	1mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の無色透明の粒	
106	縄文土器	C区：IV層	深鉢	底部				ミガキ、ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄	1mm前後の無色透明の粒、微細～2mm大の赤褐色の粒、0.5mm～8mm大の石	
107	縄文土器	SG1	壺	底部		推定8.7		ミガキ、ナデ	調整不明	にぶい黄 にぶい橙	黄灰 にぶい黄橙	3.5mm以下の灰色、黄褐、灰褐色の砂粒	風化
108	縄文土器	B区：IV層上面	鉢	底部				ミガキ	ミガキ	黒褐	灰黄褐	3mm以下の赤褐色粒、2.5mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の乳白色粒、透明光沢粒	風化

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調整で古墳時代の遺構はＢ・Ｃ区から検出されている。検出された遺構は竪穴住居跡３軒、土壙墓１基である（第24図）。遺物はごく一部の例外を除いて古墳時代初期に属するものであり、遺構もおおむね同時期の所産と考えられる。

(1)　竪穴住居跡

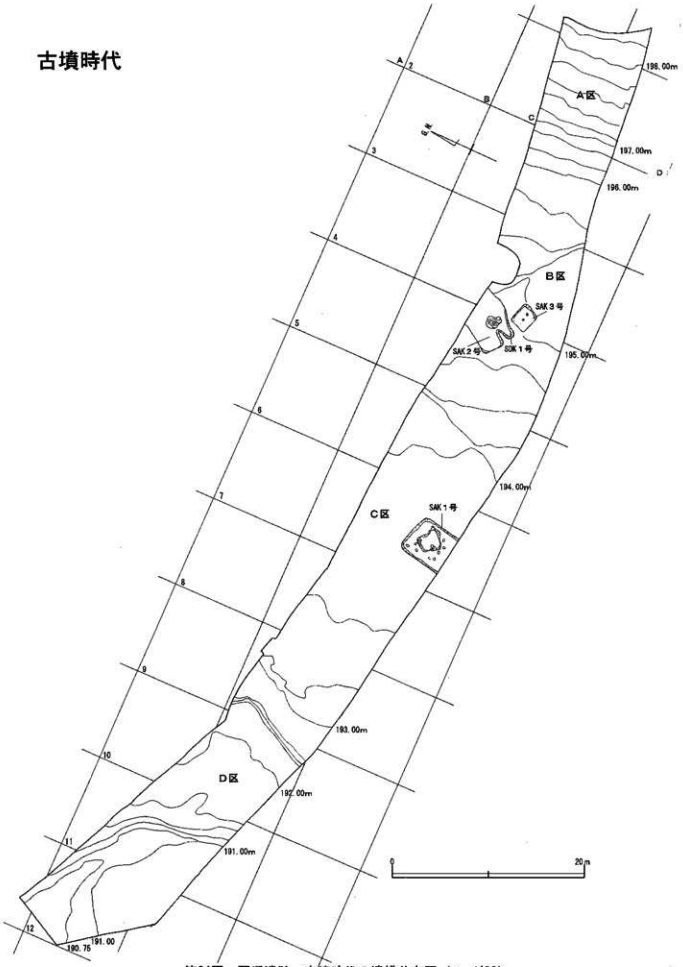
１号竪穴住居跡（ＳＡＫ１：第25図）

Ｃ区の南壁沿やや中央の御池ボラ上面で、Ｄ７グリットから検出された。方形プランの住居跡で、南北方向4.4m、東西方向4.1m、検出面からの深さ45～62cmを測る。床面中央には長軸2.7m、短軸2.3mの不定形の浅い窪みがあり、その埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は、御池ボラを含む褐色土や暗褐色土が堆積するが撹乱している部分もあり一様ではない。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央の窪み付近にその集中があった。床面には貼り床も見られず、硬化面や焼土等も確認できなかった。主柱穴は方形配置の４基と同心円上に７基を配する。径が20～35cmで床からの深さは25～60cmを測る。遺物の多くは床面直上が若干浮いた状態で多量に出土した。

出土遺物は第28図～第31図に示している。この住居に伴う遺物（109～152）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、109～117は断面三角形の貼付刻目突帯を持つ甕である。109は胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は直口する甕である。内外面ともハケ目調整である。外面に一部ススが付着している。110は胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する甕である。内外面とも横・斜方向の八ケ目で、一部ススが付着し指頭痕がみられる。111～114は胴部から口縁部が直線的に外側に開く甕である。111～113は内外面とも工具による横・斜方向の八ケ目のナデを施している。外面には一部指頭痕がみられる。114は内外面とも工具による斜方向のナデの後に施している。115～117は胴部上半に断面三角形の貼付突帯を巡らす甕の胴部片である。118・119は口縁部が直口する甕の口縁部である。118は内外面とも不定方向のハケ目後ナデを施し、119は内外面ともナデ調整である。120は頸部が緩やかに屈曲し、胴部上半にやや膨らみを持つ甕である。外面はナデ、横・斜方向にハケ目を施し、内面は横方向のナデ、斜方向のハケ目を施している。121・122は甕の底部である。121は外面はナデ、斜方向の工具痕を施し、内面は斜方向のナデを施している。122は外面はナデ調整で、木の葉圧痕が残る。内面調整は不明である。

123～128は壺である。123は胴中央部に最大径を持つやや長胴の壺である。口縁部はわずかに外傾して端部が内湾する。内外面とも斜方向のハケ目を施している。124は胴部上位の張った偏球形を呈する。胴部最大径の半分より小さくくびれた頸部から口縁部が直口した壺で、丸底の底部を呈する。外面は横方向のナデ、不定方向のハケ目を施し、内面は不定方向のハケ目を施している。125はやや長胴気味の壺である。口縁部は外傾してわずかに内湾する。外面は横方向のナデ、工具による不定方向のナデ（ハケ目）を施し、内面はナデを施している。126は小型の丸底壺である。口縁部は内湾気味に外側に開いて立ち上がり、口唇部は細く仕上げている。外面は横・斜方向のミガキ、内面はミガキを施している。127は壺で、外傾して立ち上がる口縁部は端部が内湾する。外面は横・斜方向のナデ、横・斜方向のハケ目を施し、内面は横方向のナデを施している。128は小型壺の胴部で、外面はミガキ、内面はナデである。129・130は胴部中位の張った偏球形を呈する二重口縁壺である。胴部最大径の半分以下にくびれた頸部から口辺部が外側に開き、屈曲して若干外側に開き気味の口縁が立ち上がると思われる。外面は

古墳時代



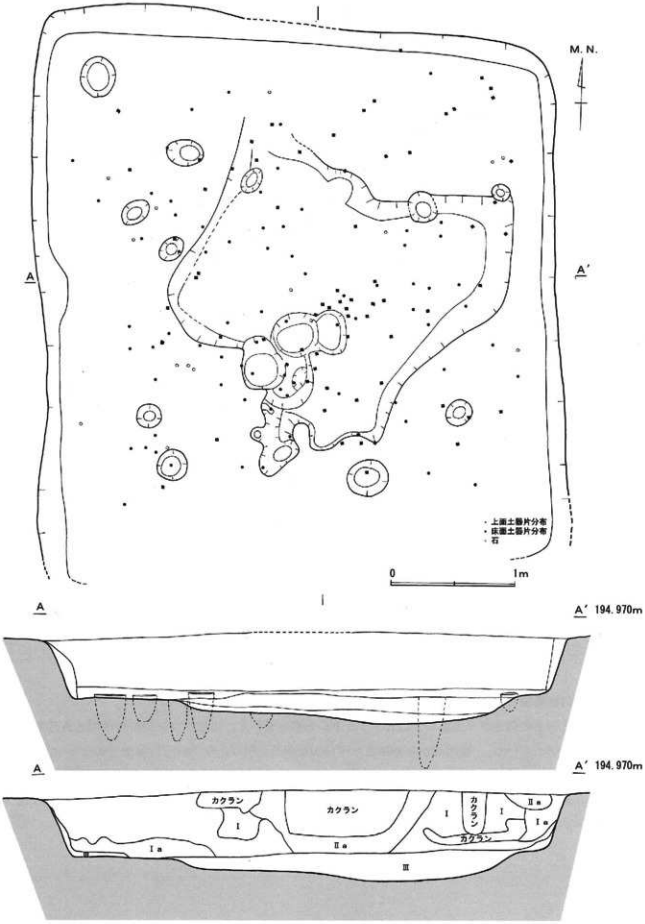
第24図　野添遺跡　古墳時代の遺構分布図（1／400）

ミガキ、内面はナデを施している。

131～149は高坏である。131は内湾する坏底部から大きく外反して口縁部へと開く坏部を呈する。屈曲部には明瞭な稜を持つ。外面はミガキ、内面はミガキ、黒斑と思われるが、風化が著しいため調整不明瞭である。132は体部に稜を持たない坏で内湾気味に立ち上がる。調整は外面はミガキ後ナデを施し、内面はナデである。133は坏部で坏底部と口縁部との間に明瞭な稜を持たずに立ち上がり、口縁端部は若干内湾する。外面は丁寧なナデ、ミガキ後ナデを施し、内面は横方向のナデである。134は外反する口縁部が大きく開く坏部を呈する。外面は横方向のナデ、ミガキを施し、内面はミガキ、黒斑が見られる。135は坏底部と口縁部との間に稜を持たず浅い椀状を呈して口縁部が外側に開いて立ち上がり、口唇部は細く仕上げている。外面はミガキ後ナデ、内面はナデである。136は144のような脚部の脚裾部と思われる。外面は横方向のナデ、斜方向のミガキを施し、内面は横方向のナデ、内黒を施している。137～139は口縁部が直口して広く開く坏部を呈する。137は外面はミガキ後ナデ、内面はナデ、黒斑が見られる。138・139は内外面とも横方向のナデを施している。内面に一部黒斑がみられる。140・141は口縁部は外側に開き、口唇部が丸く仕上げている。調整は140は内外面ともナデで、141は内外面とも工具によるナデである。142は体部から脚部である。体部は屈曲部に明瞭な稜を持ち、大きく外反して口縁部へ開くもので、脚部は短い裾広がりの「ハ」字状である。調整は内外面ともミガキ後ナデである。143はやや内湾する坏底部である。内外面ともミガキである。144は坏底部～脚部である。脚部はいわゆるエンタシス状に中位で若干膨らみを持つ。坏部の外面は横方向のナデで、脚部の外面は縦方向のミガキ後ナデで、内面はナデで粘土の継ぎ目上には多くの指頭痕が残る。145は脚部である。「ハ」字状に開き、若干の膨らみを持った太い脚部である。内外面とも横方向のナデで、内面に多くの指頭痕が残る。146～149は裾部である。146～148は緩やかに「ハ」字状に大きく開き、内端面で接地する形状を呈すが、中位の膨らみが146は147に比べて大きい。外面は横方向のナデ、ミガキ後ナデを施し、内面はナデで一部指頭痕が残る。148は内外面ともミガキである。149も「ハ」字状に広がる裾部である。外面はミガキ、内面は横・斜方向のナデである。150は埦である。内外面ともミガキで、内面に黒斑がみられる。151は杓子状土製品の柄部と考えられる。柄部の全長は約6.0cmを測る。内外面とも指ナデで仕上げている。152はミニチュア土器である。内外面とも指頭痕が多く残る。

２号竪穴住居跡（ＳＡＫ２：第10図）

Ｂ区の北寄りの御池ボラ上面で、Ｃ５グリッドから検出された。方形プランの住居跡でＳＡＫ２がＳＡＪ７を切っている。。検出面からの深さ７～13cmを測る。明らかな主柱穴は検出できなかった。住居の埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物は土器小片が少量床面に出土したが、小片で風化しているため器種については不明である。

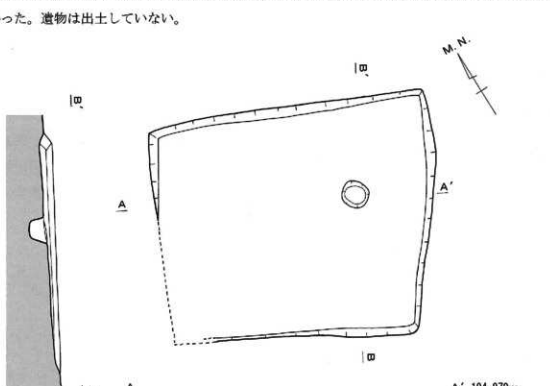


【土層注記】SAK1
Ⅰ　褐　色（10YR4／4）1～2mmの黄褐色粒子、炭化物を多く含む。　Ⅰa褐　色（10YR4／4）5～10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。
Ⅱ　明褐色（7.5YR3／4）5～10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。　Ⅱa暗褐色（7.5YR3／3）5～10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。
Ⅲ　明褐色（7.5YR3／4）1～2mmの黄褐色粒子を多量に含む。

第25図　野添遺跡　K1号竪穴住居跡実測図（SAK1：1／30）

３号竪穴住居跡（ＳＡＫ３：第26図）

２号住居跡の南東側約３mの位置に検出された。方形プランの住居跡で、南北方向1.9m、東西方向2.24m、検出面からの深さは４～６cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、長軸方向が西南西側に若干傾斜する。床面に主柱穴は検出できなかったが床面中央東側に径17cm、深さ15cmのピット１基を配する。住居の堆土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物は出土していない。



第26図　野添遺跡　Ｋ３号竪穴住居跡実測図（ＳＡＫ３：１／30）

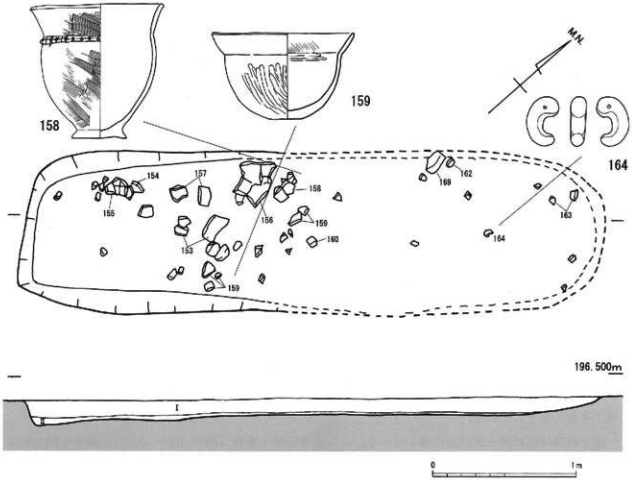
(2)　土壙墓

１号土壙墓（ＳＤＫ１：第10図・第27図）

Ｂ区の北寄りの御池ボラ上面で、Ｄ５グリッドから検出された。Ｊ７号竪穴住居跡と切りあっており、規模は長軸約200cm、短軸約88cm、深さは10～15cmを測る。底面はＪ７号に向けて次第に浅くなる。平面形態は長方形で、断面形態は箱状を呈すると推測される。覆土は基本土層Ⅲ・Ⅳ層を主体とする。遺物は多量に出土している。

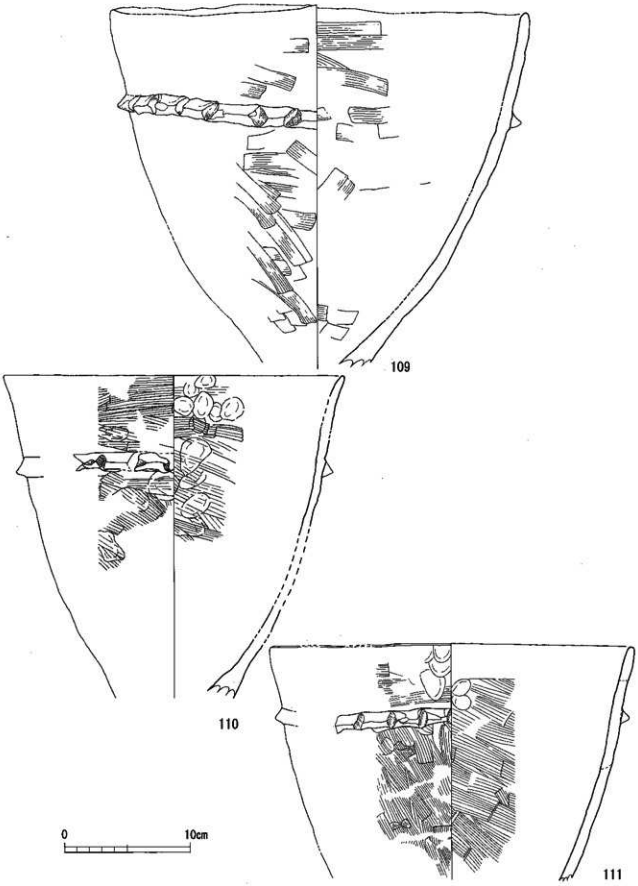
出土遺物は第32図～第34図に示している。この遺構に伴う遺物（153～164）は主に下層から出土しており、プランの全体に分布している。遺物の内訳は、153は断面三角形の貼付刻目突帯を持つ甕で、胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は直口する。内外面ともハケ目調整である。外面に一部ススが付着している。154と155は同一個体の壺である。複合口縁をもつもので、口縁部がほぼ直立するものである。口縁部外面に櫛描波状文を施している。調整は外面に斜方向のハケ目、ナデ、内面は横・斜方向

のハケ目で口縁部に指頭痕がみられる。胴部の外面にススが付着し、内面には炭化物が付着している。156と157は同一個体の壺である。胴部中位の張った偏球形を呈する。底部は凸レンズ状の丸底である。調整は横・斜方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目、ナデである。一部指頭痕が残る。158は口縁部が緩やかに外反し、胴部はやや膨らみを持ち底部へとすぼまる小型の壺である。やや上げ底で裾部は外側に開く。頸部下に貼付刻目突帯を持ち、調整は外面はハケ目、内面はナデを施している。内外面とも黒斑がみられる。159は小型丸底壺である。頸部にくびれを持ち、内湾気味の口縁部が外方にのび、体部は埦状を呈する。外面は横方向のナデ、斜方向のハケ目、ミガキを施し、内面は丁寧なナデを施している。160は頸部くびれ部からやや内湾気味の口縁部が立ち上がる小型の壺である。調整は内外面ともナデである。内面に指頭痕が残る。161と162は同一個体で高坏になると思われる。161は坏部で、坏底部と口縁部との間にやや稜を持つ。調整は外面は工具による横・斜方向のハケ目、内面はナデである。162は脚柱部と裾部との間に屈曲を持たずに裾部が開くものと思われる。外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のナデ調整である。163は高坏の体部である。小さな坏底部からわずかに外反する口縁部が開く。屈曲部外面には稜を持ち、外面はナデ、工具ナデ、内面は丁寧なナデである。164は勾玉である。蛇紋岩製で１点のみの出土である。C字状に湾曲する形状で、頭部に両端より穿孔を施している。

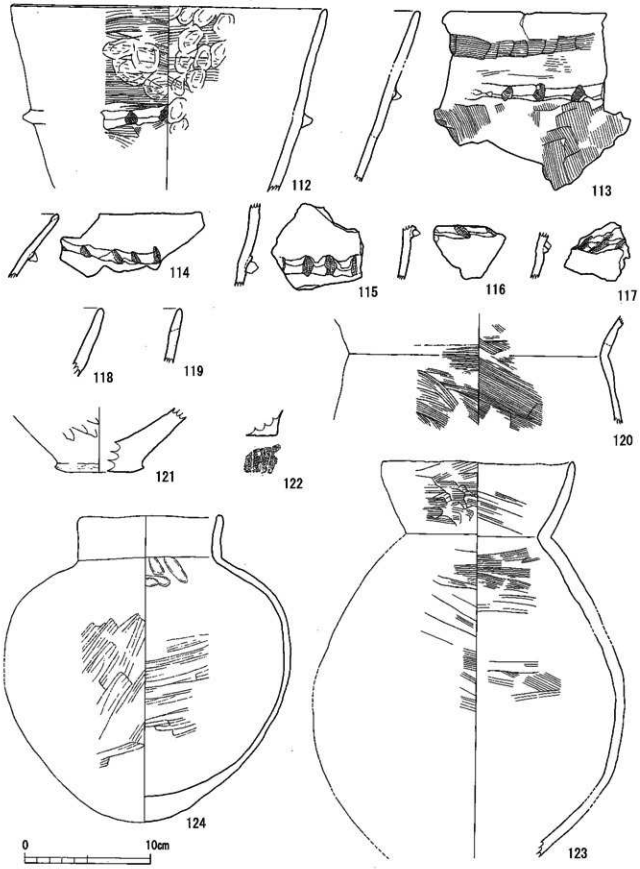


【土層注記】ＳＤＫ１
Ⅰ　暗褐色（7.5YR３／４）黒色土と黄橙色粒子が混在する。
Ⅱ　暗褐色（7.5YR３／４）黄橙色粒子が多量に混在する。

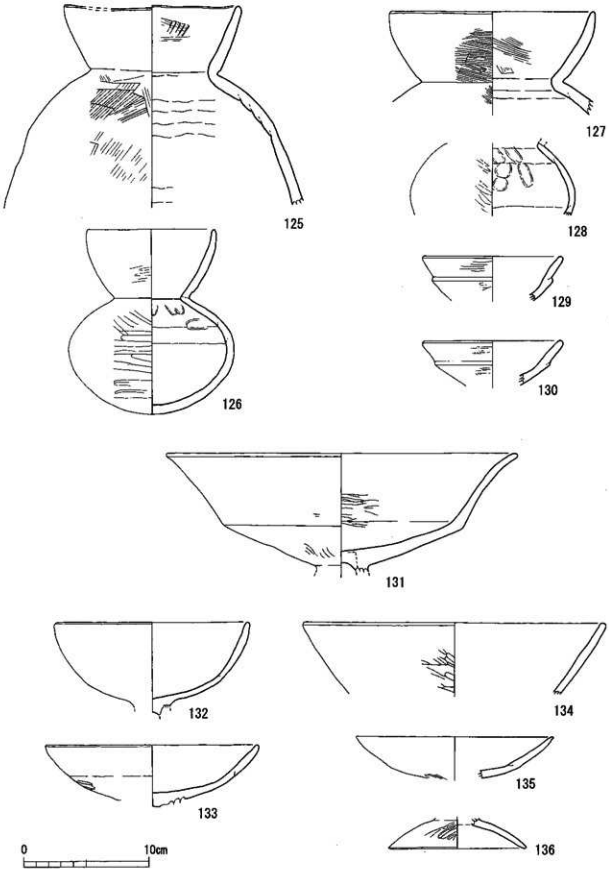
第27図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓実測図（ＳＤＫ１：１／40）



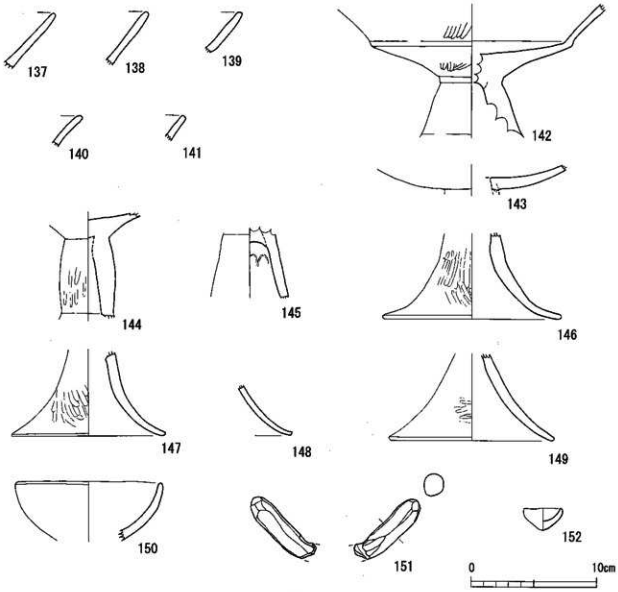
第28図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(1)（１／３）



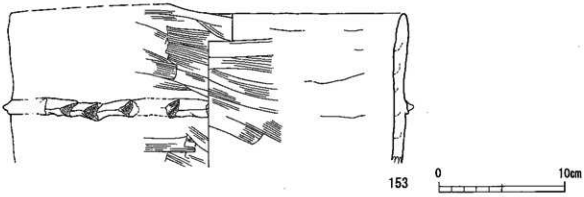
第29図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(2)（１／３）



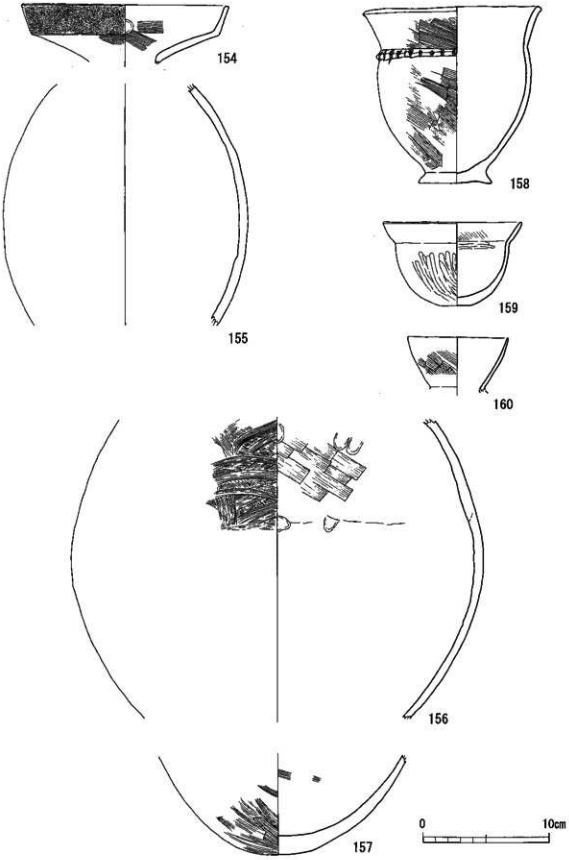
第30図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(3)（１／３）



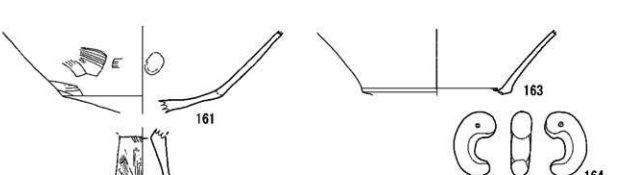
第31図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(4)（１／３）



第32図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(1)（１／３）



第33図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(2)（１／３）

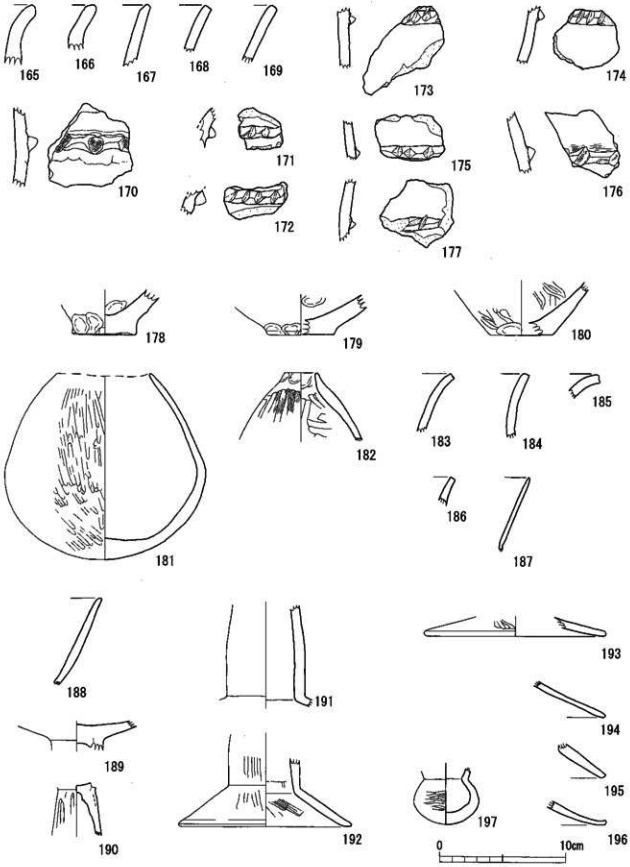


第34図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(3)（１／３）

(3)　包含層出土の遺物

古墳時代の土器の遺物包含層はＢ区・Ｃ区の第Ⅲ層からⅣ層である。甕・壺・高坏の土器が出土している。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第35図に示している。

165～169はの甕の口縁部である。165・166はロ縁部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデで、工具痕が残る。167はロ縁部がまっすぐにのび、口唇部はわずかにつまみだしている。内外面ともハケ目調整でススが付着している。168・169はロ唇部が平らに仕上げている。168は内外面とも横方向のナデで外面にススが付着している。169は内外面ともハケ目調整である。170～177は胴部上半に断面三角形の貼付突帯を巡らす甕の胴部である。170～172は内外面ともナデ調整である。173～177は内外面とも横・斜方向のハケ目調整である。178～180は甕の底部である。178はわずかなくびれを持って内湾する胴部が外方に延びる。わずかに上げ底を呈する。内外面ともナデで指頭痕がみられる。179～180は平底で、くびれを持たずに内湾する胴部が立ち上がる。179は外面はナデで一部黒変している。内面は不定方向の工具によるナデである。180は内外面ともナデ調整である。181～187は壺である。181は肩部のあまり張らない丸底の壺である。頸部くびれ部から内湾気味の口縁部が外側に開くものと考えられる。調整は外面はミガキ、横・斜方向のハケ目である。182は扁平気味の胴部を持つ小型土器である。内外面ともハケ目調整である。183～187は壺の口縁部である。183～186は直口する頸部から口縁部が外反し開いている。内外面ともハケ目調整である。187は直口する頸部から口縁部が直口し開いている。内外面とも斜方向のハケ目調整である。188～196は高坏である。188は体部にごくわずかな稜をもつ坏部で口唇部が若干外反する。調整は外面はミガキ後ナデ、内面はナデである。189は坏底部で、外面はナデ、内面はミガキである。190は円柱状を呈す。外面はミガキ、内面はナデである。191・192はやや膨らみを持った柱状部で、191はエンタシス状の脚柱部に屈曲して裾部が大きく広がる。外面はミガキ、内面はハケ目、ナデ調整である。192は内外面ともナデ調整である。外面は一部黒変している。193～196は裾部である。193・194は大きく開く裾部で、外面は横方向のナデ、内面は横方向のナデ、ハケ目である。195は柱状部から屈曲して広がる裾部と思われる。外面はミガキ、内面は風化しているため調整不明である。196は裾部が緩やかに外反し、内端面で接地する。内外面とも風化しているため調整不明である。197はミニチュア土器である。外面はナデ、ミガキ、内面は横方向にナデである。



第35図　野添遺跡　包含層（古墳時代）出土土器実測図（1／3）

3　古代の遺物

古代については遺構の確認はできず、遺物が若干出土しただけである。古代の遺物は主に第Ⅲ層から出土している。口縁部が開き、口唇部を丸く仕上げた甕、土師器坏、高台付き埦、土師器皿、布痕土器、須恵器、紡錘車などがある。

(1)　包含層出土の遺物

古代の土器の遺物包含層はＢ区・Ｃ区の第Ⅱ層から第Ⅲ層である。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第36図に示している。

198～224は古代の土器である。198～202は土師器甕である。198・199は胴部に膨らみを持ち、口頸部が緩やかにくびれ外反する甕である。198は外面は横方向のナデ、内面は工具による横方向のナデを施し、199は内外面とも工具による甕であると思われる。200は胴部に膨らみを持ち、口頸部が「く」字状に強く屈曲し、外反する甕であると思われる。内面はハケ目、外面は横方向のナデである。201はわずかなくびれを持って内湾する胴部が外方に延びる。底部の中央部がわずかに窪む。外面はヘラミガキ、ナデを施し、内面はナデである。202は甕の底部で、くびれを持たずに直線的な胴部が立ち上がる。202は内外面ともナデである。

203～210は土師器坏である。203は底部から体部への稜を持たないで口縁部にかけて若干外反しながら延びるものである。口唇部は細い。内外面とも回転ナデである。204～207は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラッパ状に大きく開くものである。内外面とも回転ナデである。203～210はヘラ切り離しとみられる。208～210は円盤高台状の底部形態を呈するものである。内外面とも回転ナデが施されている。209・210は、切り離し後に丁寧な工具調整が施されている。

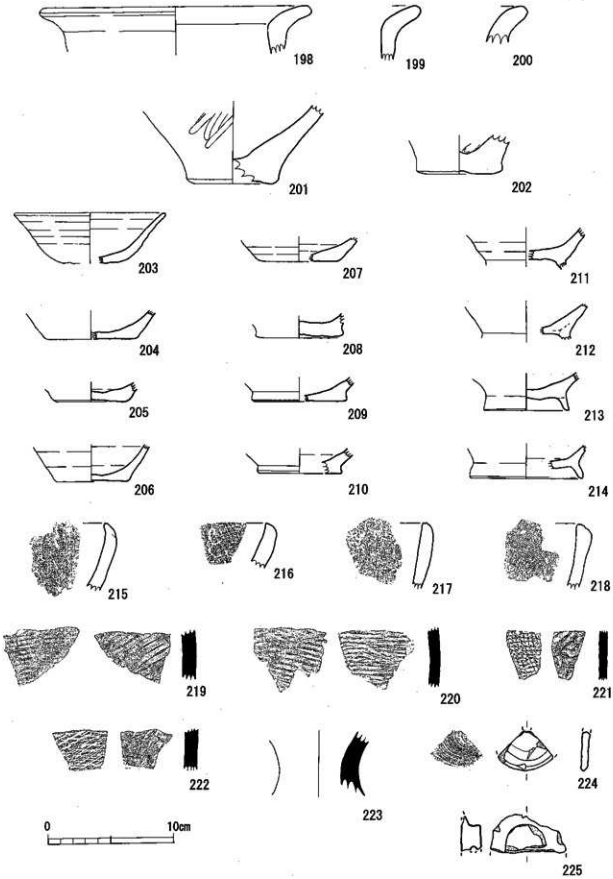
211～214は高台付き埦である。211・212は高台端部が外側に開いた高台が体部直下よりもやや外寄りに付き、体部はやや内湾しながら立ち上がるものである。内外面とも風化気味であるが回転ナデがみられる。212は内外面ともナデ調整である。213・214は黒色土器の高台付き埦である。体部から口縁部にかけて外側に直線的に延びるものと思われる。高台端部は面取りされ、外側に開く。内外面ともナデ調整である。

215～218は布痕土器の口縁部である。製塩や塩の運搬に使用されたと思われる円錐状を呈する土器である。体部から内湾気味に延びていき、端部断面を三角形に形成する。一般的には尖底を呈し口縁端部は製作過程によるヘラ切り落としで面取りがされている。外面に指頭痕が残るナデ調整で、内面に粗い布目圧痕を残している。全体的に軟質で長時間火を受けたような橙色を色調とする。

219～223は須恵器である。219～222は甕とした遺物であるが、器種の区別が曖昧なところがある。219・220は内外面とも条線状に平行タタキを施している。221は外面は格子目のタタキを施し、内面は同心円当具痕がみられる。222は外面は縦と横方向の交叉状にタタキを施し、内面はタタキ後ナデを施している。223はその形状から長頸壺の頸部の可能性が強い。内外面ともナデ調整である。

224は土師質の坏または皿の底部を転用した紡錘車である。

225は滑石製の蓋のつまみである。



第36図　野添遺跡　包含層（古代）出土土器実測図（1／3）

4　中世から近世の遺構と遺物

今回の調査で中世から近世の遺物は少なく、遺構に伴うものも僅かであるが、若干の出土遺物と埋土中の火山灰の状況から遺構の時期の位置付けを行った。中世から近世の遺構は、調査区のＢ・Ｃ・Ｄ区から検出されている。検出された遺構は、土壙墓２基、土坑２基、溝状遺構２条、道路状遺構２条である。遺物は中世に属するものであり、遺構もおおむね中世の所産と考えられる。但し、溝状遺構・道路上遺構については埋土の状況から近世のものと判断した。

(1)　土壙墓

１号土壙墓（ＳＤＴ１：第38図）

Ｃ区の南端部北壁沿で、Ｃ９グリッドが検出された。周辺には西に隣接してＳＧ１号道路状遺構が存在する。規模は長軸約145㎝、短軸約82㎝、深さは16～25㎝を測る。平面形態はやや不整の長方形で、断面形態は箱状を呈する。主軸方位はＮ－21°－Ｗである。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第43図に示している。この遺構に伴う遺物（226～231）は主に中層から出土している。遺物の内訳は、226は土師器坏で、体部から口縁部にかけて外反しながらのびるものである。全体を比較的に厚く仕上げた坏で、底部は糸切りを呈する。内外面とも回転ナデである。227～231は土師器皿である。227は体部が丸みを帯びながら立ち上がり、口唇部は面取りされ若干外反する。外面は回転ナデで、内面は回転ナデ後指ナデを施している。底部は糸切りを呈する。228～230は器高に比して底部の器壁が厚く、法量も小さい。231はヘラ切り底で、内外面とも横方向の回転ナデ調整である。228～230は糸切り底で、内外面とも回転ナデである。

２号土壙墓（ＳＤＴ２：第38図）

Ｃ区の南縁ほぼ中央で、Ｄ８グリッドから検出された。周辺には東に約5.5m離れてＫ１号竪穴住居跡が存在する。規模は長軸約138㎝、短軸約95㎝、深さは41㎝を測る。平面形態は楕円形で、断面形態は皿状を呈する。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第44図に示している。この遺構に伴う遺物は主に上層から出土している。232は土師器の皿である。232は内外面風化しているが回転ナデ調整が加えられた皿で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁は不整形である。底部はヘラ切り離しである。

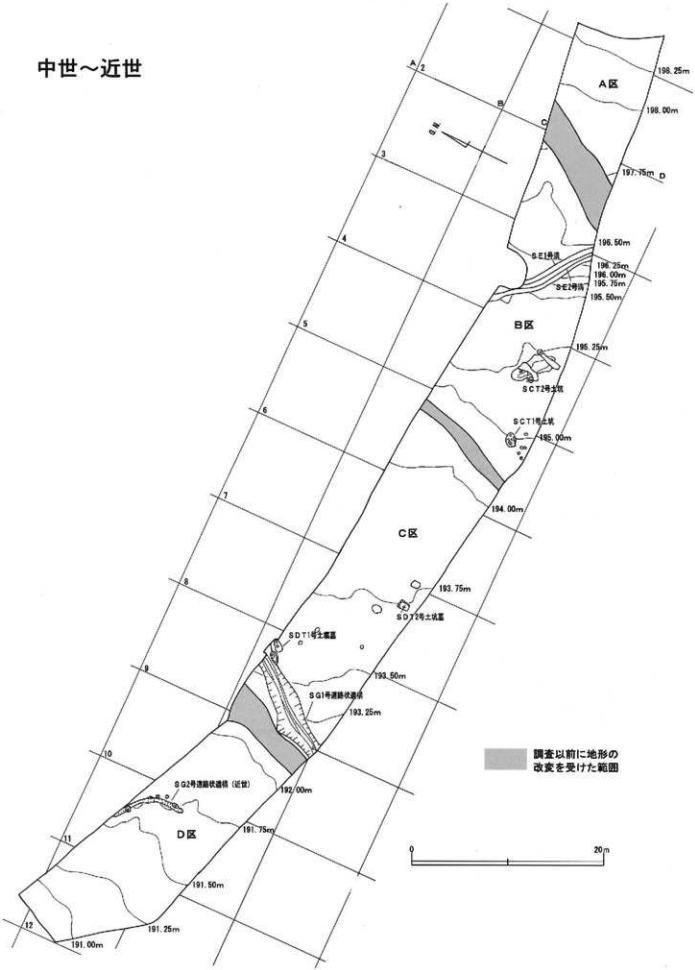
(2)　土坑（ＳＣ）

１号土坑（ＳＣＴ１：第38図）

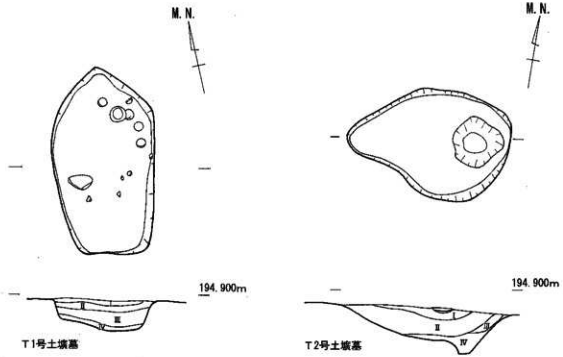
Ｂ区の南端部南縁沿で、Ｃ９グリッドから検出された。周辺には東に約５m離れてＴ２号土坑が存在する。規模は長軸約145㎝、短軸約82㎝、深さは16～25㎝を測る。平面形態はやや不整の長方形で、断面形態は箱状を呈する。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第45図に示している。この遺構に伴う遺物（233～235）は主に中層から出土している。遺物の内訳は、233は土師器質の小型土器の口縁部である。内外面とも横方向のナデである。234・235は土師器質の坏の口縁部である。体部は基本的にラッパ状に大きく開くもので、口縁が緩く外反する。外面は回転ナデ、内面はナデを施している。

中世～近世

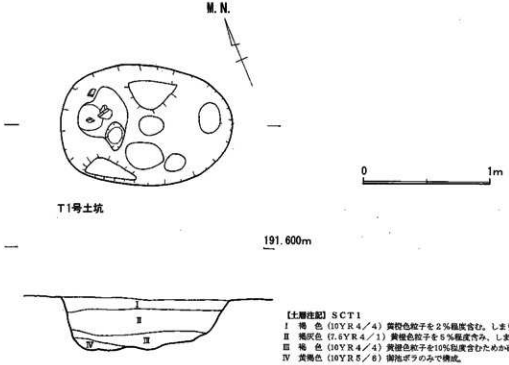


第37図　野添遺跡　中世から近世の遺構分布図（1／400）



【土層注記】SDT1
Ⅰ 暗褐色（10YR3／4）直径1～2mmの黄橙色粒子を微量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
Ⅱ 暗褐色（10YR3／4）直径3～5mmの黄橙色粒子を多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
Ⅲ 暗褐色（10YR3／4）直径3～5mmの黄橙色粒子を多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
Ⅳ 御池軽石層直径1～10mmの黄橙色粒子のみで構成。しまりややあり、粘性なし。

【土層注記】SDT2
Ⅰ 暗褐色（7.5YR3／3）直径1mmの黄橙色粒子を少量含む。しまりが弱く、粘性ややあり。
Ⅱ 暗褐色（7.5YR5／8）直径1mmの黄橙色粒子を多量含む。しまりが強く、粘性あり。
Ⅲ にぶい褐色（7.5YR6／3）直径1mmの黄橙色粒子を少量含む。しまり弱く、粘性なし。
Ⅳ 黄橙色（7.5YR6／8）御池軽石直径1mmの黄橙色粒子のみで構成。しまり、粘性なし。



【土層注記】SCT1
Ⅰ 褐　色（10YR4／4）黄橙色粒子を2％程度含む。しまりがなく、粘性なし。
Ⅱ 褐灰色（7.6YR4／1）黄橙色粒子を5％程度含み、しまりがあり粘性あまりない。
Ⅲ 褐　色（10YR4／4）黄橙色粒子を10％程度含むためか砂粒がザラザラしている。
Ⅳ 黄褐色（10YR5／6）御池ボラのみで構成。

第38図　野添遺跡　T1号・T2号土壙墓、T1号土坑実測図（1／30）

２号土坑（ＳＣＴ２：第39図）

1号土坑の東側約５ｍの位置に検出された。規模は長軸約145㎝、短軸約82㎝、深さは16～25㎝を測る。平面形態は不整形な形で、断面形態は鍋状を呈する。覆土は撹乱部分もあるが１号土坑と違い褐灰土を主体とし、御池ボラや炭化物粒子が混入する。１号土坑よりもやや新しい時期のものと考えられる。遺物は出土していない。

(3) 溝状遺構

１号溝（ＳＥ１：第40図）

Ｂ区中央部で、標高約195.25ｍ付近から検出された。遺構は山の斜面に沿って南南東壁から北北西方向に約7.5ｍ延び、その先は調査区外へ続く。主軸方向はＮ－８°－Ｗである。溝の幅は1.2ｍ～２ｍで検出面からの深さは最深部で36㎝を測る。底面は断面Ｕ字形を呈し、北北西に向かって次第に深くなる。溝上面には部分的に厚さ0.5～１㎝の硬化面が表れ、埋土は１㎜程度の御池ボラ粒を少量含む粘質の褐色土である。埋土中に文明ボラ層は介在しない。

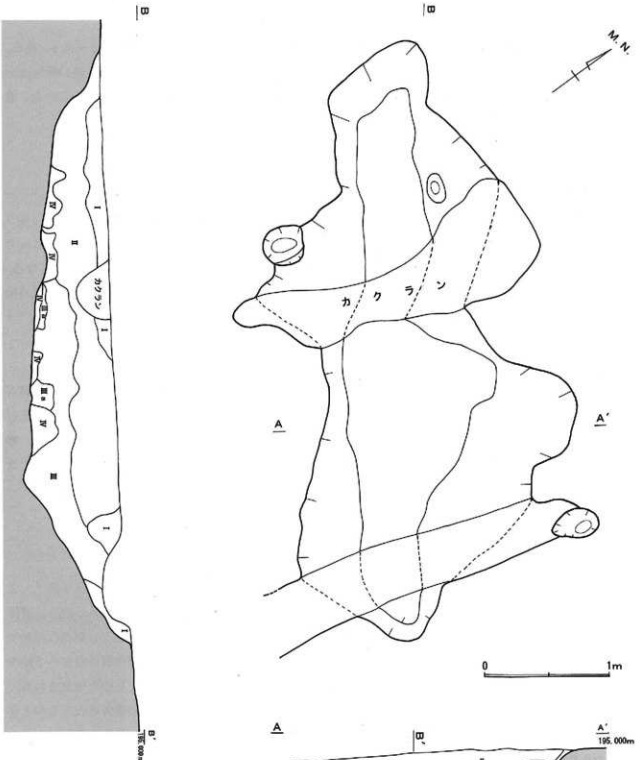
２号溝（ＳＥ２：第40図）

２号溝は、山の斜面に沿って南東壁から北西方向延び、１号溝と並行している。なお、その先は調査区外へ続く。長さは12.3ｍ、幅は１ｍ～２ｍで検出面からの深さは最深部で25㎝を測る。底面は断面Ｕ字形を呈し、北西に向かって次第に浅くなる。溝上面には部分的に厚さ0.5～1.2㎝の硬化面が表れ、覆土は１㎜程度の御池ボラ粒を少量含む粘質の褐色土である。埋土中に文明ボラ層は介在しない。また遺物も出土していない。

(4) 道路状遺構

１号道路状遺構（ＳＧ１：第41図）

Ｃ区南端部で、標高約193ｍから検出された。走行は北東から南西で、検出全長は10.8ｍを測り、主軸方向はＮ－88°－Ｅで上面幅は南西に走行する程広がる傾向にある。その先は調査区外へ続く。道路の幅は、2.05ｍ～2.3ｍで検出面の深さは最深部で60㎝を測る。底面は断面Ｕ字形を呈し、南西に向かって次第に深くなる。断面を見ると幅約20～35㎝、厚さ５～10㎝の硬化層がある。硬化層は径１～３㎜の黄橙色粒子と白色粒子を多量に含み、二層観察され、二時期にわたって使用されたものと推定される。覆土は硬く御池ボラを少し混在する褐色土層が主体である。出土遺物は古墳時代の甕や古代のものと思われる高台付き坑などが出土しているが、床面から浮いているものが殆どで、流れ込みの遺物であると思われる。



【土層注記】ＳＣＴ２

Ⅰ　褐　色（10ＹＲ４／４）御池ボラを２％程度含む。植物による攪乱を受けている。パサパサで粘性なし。

Ⅱ　褐灰色（7.5ＹＲ４／１）Ⅰよりしまりがあり、Ⅲａをブロック状に20％程度含む。御池ボラを５％程度含み、10～30mmの植物塊が炭化したものを３％程度含む。

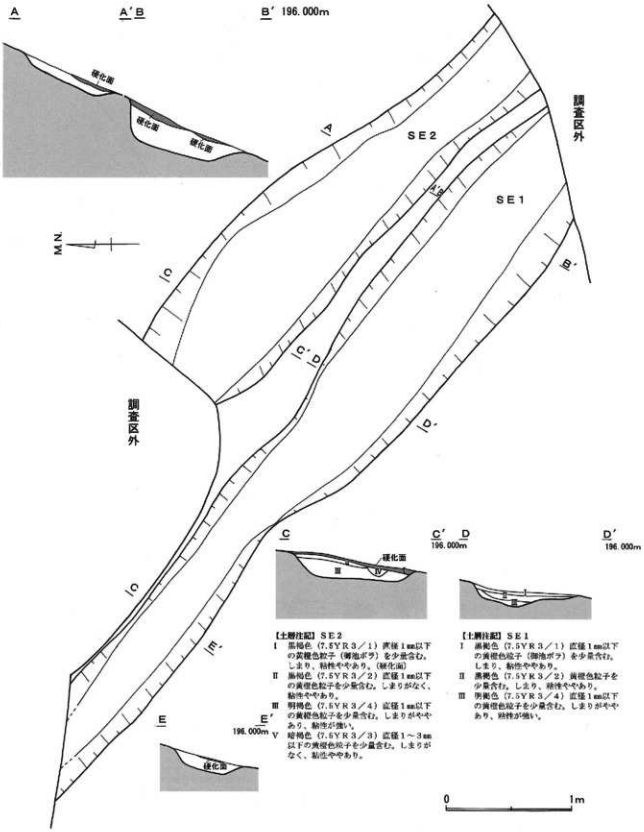
Ⅲ　褐灰色（7.5ＹＲ４／１）Ⅱと混層だがⅡよりⅢａをブロック状に多く含む。

Ⅲａ褐　色（10ＹＲ４／４）粘りがあり、御池ボラを10％程度含むためか砂粒がザラザラしている。

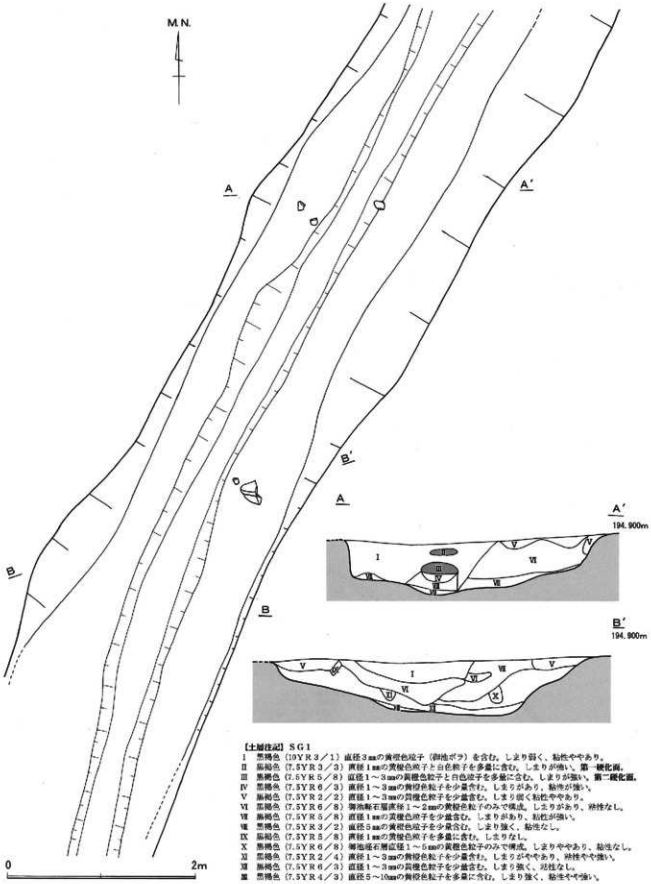
Ⅲｂ褐　色（10ＹＲ４／４）50％以上の御池ボラを含む。

Ⅳ　黄褐色（10ＹＲ５／６）御池ボラのみで構成。

第39図　野添遺跡　Ｔ２号土坑実測図（ＳＣＴ２：１／30）



第40図　野添遺跡　1号・2号溝状遺構実測図及び土層断面図（SE1・SE2：1／60）



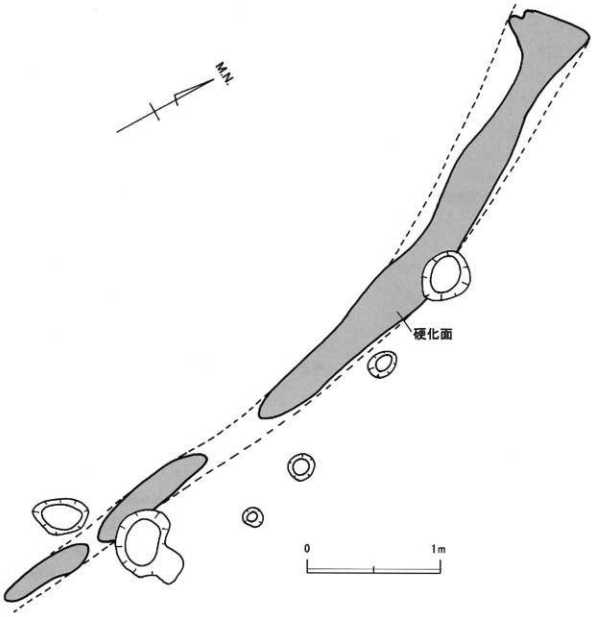
【土層注記】SG1

Ⅰ　黒褐色（10YR3／1）直径3mmの黄橙色粒子（御池ボラ）を含む。しまり弱く、粘性ややあり。
Ⅱ　黒褐色（7.5YR3／3）直径1mmの黄橙色粒子と白色粒子を多量に含む。しまりが強い。**第一硬化面。**
Ⅲ　黒褐色（7.5YR5／8）直径1～3mmの黄橙色粒子と白色粒子を多量に含む。しまりが強い。**第二硬化面。**
Ⅳ　黒褐色（7.5YR6／3）直径1～3mmの黄橙色粒子を少量含む。しまりがあり、粘性が強い。
Ⅴ　黒褐色（7.5YR2／2）直径1～3mmの黄橙色粒子を少量含む。しまり弱く粘性ややあり。
Ⅵ　黒褐色（7.5YR6／8）御池軽石層直径1～2mmの黄橙色粒子のみで構成。しまりがあり、粘性なし。
Ⅶ　黒褐色（7.5YR5／8）直径1mmの黄橙色砂子を少量含む。しまりがあり、粘性が強い。
Ⅷ　黒褐色（7.5YR3／2）直径3mmの黄橙色砂子を少量含む。しまり強く、粘性なし。
Ⅸ　黒褐色（7.5YR3／8）直径1mmの黄橙色砂子を多量に含む。しまりなし。
Ⅹ　黒褐色（7.5YR6／8）御池軽石層直径1～5mmの黄橙色粒子のみで構成。しまりややあり、粘性なし。
Ⅺ　黒褐色（7.5YR2／4）直径1～3mmの黄橙色粒子を少量含む。しまりがややあり、粘性やや強い。
Ⅻ　黒褐色（7.5YR6／3）直径1～3mmの黄橙色粒子を少量含む。しまり強く、粘性なし。
ⅩⅢ　黒褐色（7.5YR4／3）直径5～10mmの黄橙色粒子を少量に含む。しまり強く、粘性やや強い。

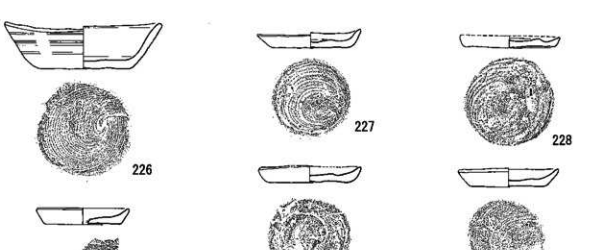
第41図　野添遺跡　1号道路状遺構実測図及び土層断面図（SG1：1／40）

２号道路状遺構（ＳＧ２：第42図）

Ｄ区中央部北壁沿で、標高約191.75ｍ付近で検出された。走行は南から北西で、検出全長4.5ｍを測り、幅約25cmの溝で溝上面はほとんど削平されて、硬化面だけがみとめられる程度にしか検出されなかった。北側の断面観察すると浅いＵ字状を呈し、底面はアカホヤ層が堆積している。硬化層の幅は10～18cm、厚さ１～３cmで、深さは計測不可能。溝の脇には柱穴が溝に沿って並んでおり、その数は６基を数える。

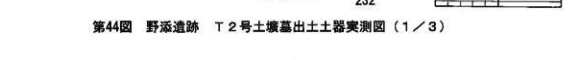


第42図　野添遺跡　２号道路状遺構実測図（ＳＧ２：１／60）



第43図　野添遺跡　Ｔ１号土壙墓出土土器実測図（１／３）

第44図　野添遺跡　Ｔ２号土壙墓出土土器実測図（１／３）

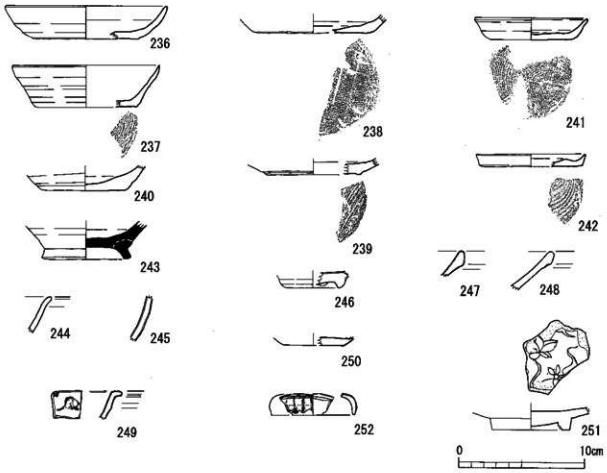


第45図　野添遺跡　Ｔ１号土坑出土土器実測図（１／３）

(5) 包含層出土の遺物

中世から近世の土器の遺物包含層はＡ・Ｂ・Ｃ区の第Ⅱ層からである。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺構は第46図に示している。

遺構外の出土遺物は数十点と少ない。236～240は土師器坏である。236・237は体部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、底部と体部の境界は明瞭である。236は内外面とも回転ナデで、底部はヘラ切りを呈する。237外面は回転ナデ、内面は横方向のナデである。底部は糸切りを呈する。238は体部が丸みを帯びながら直線的に立ち上がるものと思われる。内外面ともナデ調整でススが付着している。底部は糸切りを呈する。239は体部が直線的に立ち上がるもので、底部と体部の境界は明瞭である。内外面ともナデ調整で、底部は板状圧痕らしき痕跡が認められる。240は緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、底部と体部の境界付近の外面は明瞭な屈曲点を持つ。内外面とも回転ナデである。241・242は土師器質の小皿である。241は体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がり、口唇部は面取りされ若干



第46図　野添遺跡　包含層（中世～近世）出土土器実測図（1／3）

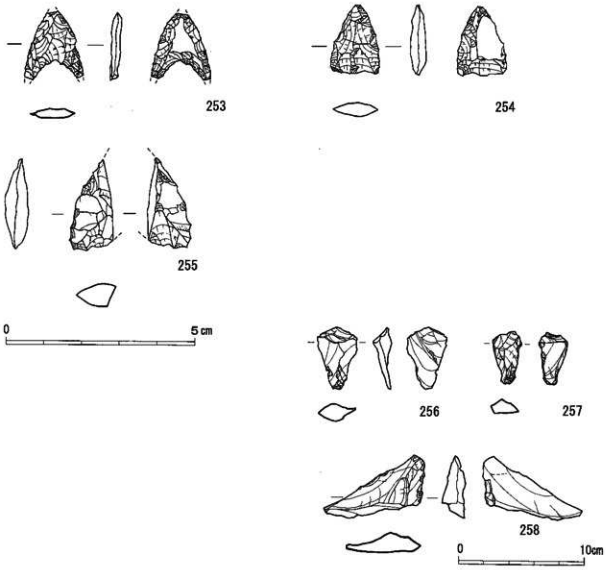
外反する内外面とも回転ナデで、底部は糸切りを呈する。242は体部が緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部の断面形は舌状を呈する。内外面とも回転ナデで、底部は糸切りを呈する。243は高台が付く須恵器である。体部がやや丸みを帯びて立ち上がり、体部直下に台形状で畳付中央がかすかにくぼむ高台が付くもので、高台内をナデ調整しているほか、畳付に工具痕が認められた。外面は回転ナデである。

244～246は青磁碗である。244は、くすんだ緑灰色の釉がかかり、内外面無文の口縁部である。口縁部はわずかに外反する。245は、胎土はきめ細やかで、緑色の釉を施し、内外面無文の体部である。龍泉同安窯系の青磁だと考えられる。246は高台付碗の底部である。器壁は厚く、高台の外面は緑色の釉がかかり、内面は無釉である。247～250は白磁である。247・248は玉緑口縁白磁碗の口縁部である。口唇部が肥圧し外反する。灰白色の釉がかかり、内外面無文である。249は白磁坏である。口縁部が内湾もしくは直立気味に立ち上がり、上端で短く屈曲する。灰白色の釉がかかる。外面は浅い沈線が巡る。250は白磁皿である。胎土はきめ細やかで、灰白色の釉を施す。内外面無文である。251は白磁碗の底部である。径4.2cmの比較的小さい高台が付く。器壁は厚く、高台の内面は無釉である。内面見込み部分には、細線の線描き花文が施されている。252は青白磁合子の蓋部である。明緑灰色の釉がかかり、内外面無文である。

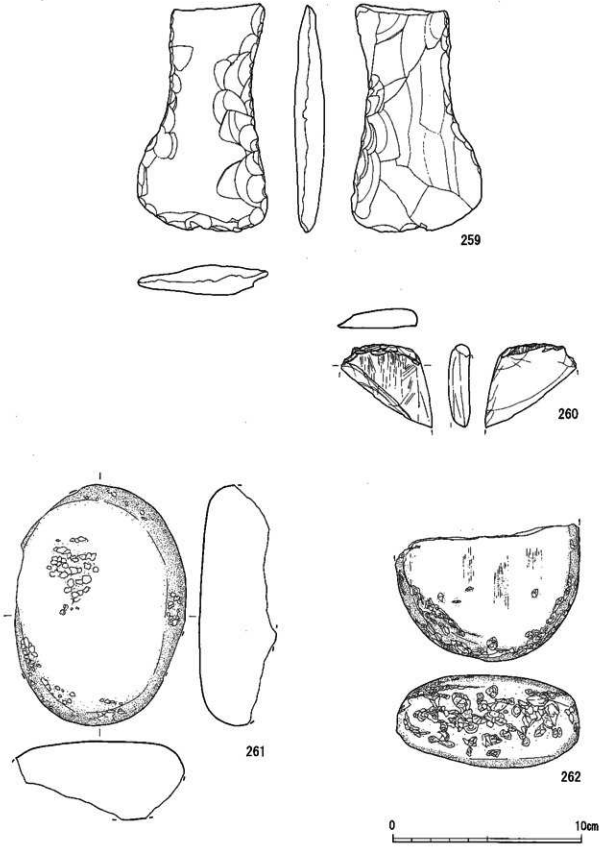
5 石 器

包含層から出土した石器は少なく、第47図～第49図に記載したものがほとんどである。石器の使用された時期については特定できないので一括して記述したい。

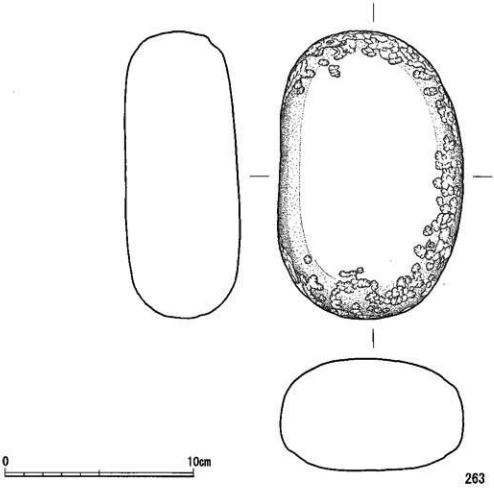
253～255は打製石鏃である。253は平面形態が正二角形をしている凹基式の石鏃である。側縁部は直線的であるが浅いU字状を作り出している。脚部は先端を尖らすものである。使用石材はチャートである。254・255は平面形態が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。側縁部は外湾するもので抉りはU字状に作り出している。脚部はまるみをつけている。254の使用石材はチャートである。255の使用石材は頁岩である。256～258は剥片である。使用石材はチャートである。259は打製石斧である。中型で両側縁部の基部近くに抉りを入れた有肩のものである。使用石材は砂岩である。260は、磨製石斧の基部破片で、縦に割れて剥片状を呈するものである。使用石材はシルト岩である。261～263は磨石である。平面形態は全て楕円形を呈し、縁周に敲打痕が観察される。使用石材は砂岩である。



第47図　野添遺跡　石器実測図(1)（1／2）



第48図　野添遺跡　石器実測図(2)（1／2）



第49図　野添遺跡　石器実測図(3)（1／2）

第４表　野添遺跡　石器計測表

遺物番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	石　材	備　考
17	剥片	ＳＡＪ１	3.3	2.3	0.8	2.8	チャート	
34	剥片	ＳＡＪ２	2.2	2.9	0.4	2.0	チャート	
41	剥片	ＳＡＪ３	3.8	5.0	0.9	14.0	チャート	
42	敲石	ＳＡＪ３	6.2	4.5	3.6	123.2	砂岩	
43	打製石斧	ＳＡＪ３	6.7	5.1	1.9	110.0	頁岩	
253	打製石鏃	Ｂ区：Ⅳ層	1.8	1.6	0.3	0.6	チャート	
254	打製石鏃	Ｂ区：Ⅳ層	1.9	1.3	0.4	0.8	チャート	
255	打製石鏃	Ｂ区：Ⅳ層	2.4	1.2	0.7	1.5	頁岩	
256	剥片	Ｃ区：Ⅳ層	2.5	1.6	0.8	1.3	チャート	
257	剥片	Ｃ区：Ⅳ層	2.1	1.2	0.7	0.5	チャート	
258	剥片	Ｂ区：Ⅳ層	2.5	4.0	0.9	4.2	チャート	
259	打製石斧	Ｃ区：Ⅳ層	12.5	6.9	15.5	144.2	砂岩	
260	磨製石斧	Ｄ区：Ⅳ層	4.4	4.8	1.2	26.7	シルト岩	
261	磨石	Ｃ区：Ⅳ層	12.7	9.1	4.3	574.2	砂岩	
262	磨石	Ｃ区：Ⅳ層	7.3	9.7	5.0	475.0	砂岩	
263	磨石	Ｃ区：Ⅳ層	15.3	9.8	6.0	1415.0	砂岩	
52	玉	ＳＡＪ４	7.3	9.7	5.0	475.0	緑色結晶片岩	
164	勾玉	Ｃ区：Ⅳ層	15.3	9.8	6.0	1415.0	蛇紋岩	

第5表　野添遺跡　出土土器察表(1)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
					(cm)								
109	土師器	SAK1	甕	口縁部～底部	推定32.7			貼付胴目突帯、ハケ目スス付着	ハケ目、黒斑、粘土のつなぎ目	にぶい黄橙にぶい橙	にぶい黄橙褐灰	1.5cm以下の褐色、赤褐色の粒	
110	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				工具による横方向のナデ、指頭痕、スス付着 貼付胴目突帯	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明赤褐明赤褐	明黄褐	7mm以下の褐色の粒、6mm以下の黒褐の粒	
111	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付胴目突帯スス付着	工具による横方向のナデ、指頭痕	橙にぶい黄橙	橙にぶい黄橙	8mm以下の褐色、明褐色の粒	
112	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付突帯、スス付着、指頭痕	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明赤褐にぶい橙	明赤褐明黄褐	8mm以下のにぶい黄橙の粒、7mm以下の黒褐の粒	
113	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付胴目突帯	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明黄褐橙	橙褐灰	9mm以下の褐色の粒、2mm以下の灰色の粒	
114	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				横要領ナデの上に工具による斜方向のナデ、貼付胴目突帯	横方向のナデの上に工具による斜方向のナデ指頭痕	浅黄	浅黄橙	6mm以下の橙の粒、3mm以下の褐色の粒1.5mm以下の半透明の粒	
115	土師器	SAK1	甕	頸部				ハケ目、貼付突帯、スス付着	丁寧なナデ、指頭痕	にぶい褐	にぶい橙	3mm以下の褐色、乳白色の粒	
116	土師器	SAK1	壺	頸部				工具によるナデ、貼付突帯	工具によるナデ	浅黄	淡黄	3mm以下の褐色の粒	
117	土師器	SAK1	壺	頸部				横方向のナデ、貼付突帯、スス付着	ナデ、指頭痕	灰黄	淡黄	最大8mmの石の粒	
118	土師器	SAK1	壺	口縁部				不定方向のハケ目後ナデ	不定方向のハケ目後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm～7mmの褐色の粒	
119	土師器	SAK1	壺	口縁部				ナデ、粘土のつなぎ目スス付着	ナデ、指押え	にぶい黄橙	浅黄	2mm～9mmの褐色の粒	
120	土師器	SAK1	壺	頸部～胴部				ナデ、横方向のハケ目斜方向のハケ目	横方向のナデ、斜方向のハケ目	にぶい黄橙	浅黄	0.5mm～3mm大の砂粒、にぶい橙、5mm～7.5mm大の黒、褐色の粒	
121	土師器	SAK1	壺	底部		推定7.0		ナデ、斜方向の工具痕	斜方向のナデ	浅黄	浅黄	2mm～7mmの褐色の粒、2mm以下の黒色　無色半透明な粒	
122	土師器	SAK1	壺	底部				ナデ、木の葉痕		にぶい黄橙		6mm前後の橙色粒、3mm以下の褐、白色粒	
123	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				斜方向の工具痕、刺離	斜方向の工具痕、刺離	橙	赤褐	1mm以下の茶褐色、灰褐色の砂粒	
124	土師器	SAK1	壺	口縁部～底部				不定方向にハケ目、横方向のナデ、一部黒変	不定方向のハケ目、指押え	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の茶褐色の粒	
125	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				横方向のナデ、不定方向の工具によるナデ	横方向のナデ、一部工具によるナデ	灰しろ	にぶい黄橙	2mm～8mmの褐色の粒、1mm以下の黒色	
127	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部	推定10.2			横・斜方向のミガキ、ミガキ	ミガキ、粘土のつなぎ目	にぶい黄橙	明黄褐	微細～1mm以下の黒色、白色、透明光沢粒、2mm大の白色の粒	風化気味
128	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				横方向のナデ、斜・横方向のハケ目、ナデ	不定方向のナデの上を斜方向のハケ目	橙にぶい黄橙	にぶい黄橙にぶい橙	0.3mm～4mmの灰褐、灰色の砂粒	
129	土師器	SAK1	壺	頸部	推定11.2			ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	橙	光る微粒子、0.5mm～3mm大の黄褐色の砂粒	風化
130	土師器	SAK1	壺	口縁部	推定11.2			ミガキ	ナデ	橙	橙	2.5mm以下の乳白色粒、1mm以下の透明光沢粒	風化
131	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定28.0			ミガキ、一部スス付着	ミガキ、黒斑	橙	明赤褐橙	2mm以下の橙色粒、半透明光沢粒、乳白色粒	風化
132	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定16.2			ミガキの上をナデ、丁寧なナデ	ナデ	橙	にぶい橙	2mm以下の黒色の微細粒	
133	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定16.8			丁寧なナデ、ミガキの上をナデ	横方向のナデ	黄橙橙	黄橙	1mm以下の黒色の微細粒	
134	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定24.0			ミガキ、横方向のナデ	ミガキ	橙	淡黄	1mm以下の白色、透明光沢粒、赤褐色の粒、微細な光沢粒	
135	土師器	SAK1	高坏	口縁部				ミガキ後ナデ	ミガキ、黒斑	黄橙	橙浅黄	2mm以下の鉄光沢で灰色の粒、1mm以下の無色透明な粒、微細なキラキラ光る粒	
136	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定11.0			斜方向のミガキ、横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、内黒	橙明黄褐	オリーブ黒	微細な透明光沢粒	
137	土師器	SAK1	高坏	口縁部				ミガキ後ナデ	ナデ、黒斑	橙	明黄褐	微細なキラキラ光る粒、1mm大の乳白色の粒	
138	土師器	SAK1	高坏	口縁部				横方向のナデ、ミガキ黒変	横方向のナデ、ナデ、黒斑	橙	明黄褐浅黄	微細な透明光沢粒	
139	土師器	SAK1	高坏	口縁部				横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ	橙にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒	
140	土師器	SAK1	坏	口縁部				ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の粒、浅黄橙色粒	
141	土師器	SAK1	坏	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	微細な灰白色、光沢粒	
142	土師器	SAK1	高坏	体部～脚部				ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ、一部黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙橙	1mm以下の黒、褐、灰白色粒、微細な光沢粒	
143	土師器	SAK1	高坏	体部				ミガキ	ミガキ	明赤褐	橙灰	6mm以下の橙色粒、2mm以下の半透明光沢粒	風化
144	土師器	SAK1	高坏	坏部～脚部				横方向のナデ、縦方向のミガキ後ナデ	ナデ、指押え	明黄褐	浅黄	光沢のある白い微細粒	
145	土師器	SAK1	高坏	坏部～脚部				横方向のナデ	横方向のナデ、指押え、指頭痕	にぶい橙	灰オリーブ	光沢のある白い粒、黒い粒	
146	土師器	SAK1	高坏	脚部～裾部		推定13.9		ミガキ後ナデ、横方向のナデ	ナデ、指押え	浅黄橙	浅黄橙	微細な光沢のある粒	
147	土師器	SAK1	高坏	脚部～裾部		推定12.0		ミガキ後ナデ、横方向のナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	浅黄橙	浅黄橙	微細な光沢のある粒、微細～2mm以下の赤褐色の粒	

第6表　野添遺跡　出土土器察表(2)

遺物番号	類別	出土地点	器種	部位	手法・調整・文様ほか (cm) 口径	底径	器高	外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
148	土師器	SAK1	高杯	脚部				横方向ナデ後ミガキ、ミガキ	ミガキ	灰白 灰黄	暗灰黄 灰白	微粒～1mm以下の白、黄褐色、丸る微粒子	風化
149	土師器	SAK1	高杯	脚部～裾部		推定 12.8		ミガキ	横・斜方向のナデ	橙	橙	微細な光沢粒、1mm以下の透明光沢粒	
150	土師器	SAK1	坩	口縁部～体部		推定 11.7		ミガキ	ミガキ、黒斑	橙	橙	精良	風化
151	土師器	SAK1	鉢(ミニチュア土器)	胴				指ナデ	指ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤褐、黒色粒	
152	土師器	SAK1	ミニチュア土器	口縁部～底部				指ナデ	指ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白、透明光沢粒、微細な光沢粒	
153	土師器	SDK1	甕	口縁部		推定 31.3		ハケ目、貼付刻目突帯、スス付着	ハケ目、粘土のつなぎ目、ナデ	にぶい黄橙 暗灰黄	橙 灰黄	1cm以下の褐色、赤褐色の粒	
154	土師器	SDK1	壺	口縁部		推定 16.4		櫛描波状文、ナデ、横・斜方向のハケ目、指頭痕	横・斜方向のハケ目、指頭痕、ナデ	淡黄	淡黄 にぶい黄橙	微細なにぶい褐、黒色、灰白の粒	
155	土師器	SDK1	壺	胴部				斜方向のハケ目、スス付着	横・斜方向のハケ目	淡黄	淡黄	微細なにぶい橙、黒色、灰白の粒	
156	土師器	SDK1	壺	胴部				斜方向のハケ目	斜方向のハケ目、指頭痕、粘土のつなぎ目	黄 オリーブ黄	淡黄	2mm以下の褐色の粒、1mm以下の黒色の粒	
157	土師器	SDK1		底部				不定方向のハケ目	ナデ、一部にハケ目	浅黄	浅黄	3mm以下の茶色、灰色、赤褐色の粒	
158	土師器	SDK1	小型土器	口縁部～底部		5.8		ハケ目、布目圧痕を施す刻目突帯、黒斑、スス付着	ナデ、黒斑	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 黄灰	3mm以下のにぶい橙、灰白、黄灰、透明光沢粒	
159	土師器	SDK1	小型甕	口縁部～底部	推定 10.9	2.4	推定 6.65	横方向のナデ、斜方向のハケ目、斜方向のミガキ	横方向のナデ、丁寧なナデ、横方向のミガキ、横方向のミガキ	黄灰 灰黄	黄灰 淡黄	微細～1mm以下の白、透明光沢粒	
160	土師器	SDK1	壺	坪部				ハケ目、ハケ目後ナデ	ナデ、指頭痕	橙	明赤褐	1mm以下の淡黄色の粒、微細な光沢のある透明ガラス粒	
161	土師器	SDK1	高杯	脚部				工具による縦・斜方向のハケ目	ナデ、丁寧なナデ	浅黄橙	淡黄 灰黄	6.5mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の無色透明で光沢のある粒	
162	土師器	SDK1	高杯	休部				縦方向の器面調整後ナデ、スス付着	縦方向にナデ	にぶい黄橙	明褐灰	微粒	
163	土師器	SDK1	高杯	口縁部				ナデ、工具ナデ	丁寧なナデ	灰黄	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄、黒色光沢粒、微細な透明光沢粒	
164	土師器	BC区：IV層上面	甕	口縁部				ナデ、別分的に工具痕	横方向のナデ、ナデ、縦方向に工具痕	にぶい褐	にぶい褐	1mm～4mmの茶褐色粒、微細な淡黄透明光沢粒	
166	土師器	BC区：IV層上面	甕	口縁部				ナデ、横方向のナデ、工具痕	ナデ、工具痕	明黄褐	明黄褐	1mm～2mmの淡黄、乳白、褐色の粒	
167	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				横方向のハケ目、スス付着	横方向のハケ目、スス付着	淡黄	淡黄	3mm以下の茶、黄褐色の粒	
168	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ	淡黄	淡黄	3mm以下の茶、黄褐色の粒	
169	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				ハケ目	ハケ目	浅黄橙 灰黄褐	灰白	4mm以下の赤褐色、褐色、灰色の粒	
170	土師器	C区：IV層上面	甕	胴部				ナデ、工具による押え刻目突帯（布目痕）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐、褐灰、灰白色粒	風化気味
171	土師器	BC区：IV層上面	壺	胴部				ナデ、貼付刻目突帯	ナデ	淡黄	浅黄橙	1mm～1.5mm大の無色透明の粒、1mm～1.5mm大の茶褐色の粒、2mm～2.5mm大の灰色の粒	
172	土師器	BC区：IV層上面	壺	胴部				ナデ、貼付刻目突帯	ナデ	灰白	灰白	0.5mm～1mm大の無色透明な粒、0.5mm～3mm大の灰、茶褐色の粒	
173	土師器	BC区：IV層上面	壺	頸部～胴部				横・斜方向のハケ目貼付突帯	斜方向のハケ目	にぶい黄	明黄褐 にぶい黄	黄色味のある粒、黒色の微細粒	
174	土師器	BC区：IV層上面	壺	頸部～胴部				斜方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	斜方向のハケ目	淡黄 にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の赤褐色の粒、灰白色の粒	
175	土師器	BC区：IV層上面	壺	胴部				ハケ目後ナデ、貼付突帯	横方向のハケ目	明黄褐	明黄褐	4mm以下の茶色の粒、2mm以下の半透明の光沢粒	
176	土師器	BC区：IV層上面	壺	胴部				横方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	横方向のハケ目	淡黄	淡黄	7mm以下の茶色の粒、5mm以下の淡灰色の粒、2mm以下の黒の粒	
177	土師器	BC区：IV層上面	壺	頸部～胴部				横方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	斜方向のハケ目	浅黄	淡黄	2mm以下の淡茶色の粒、黒い微細粒	
178	土師器	BC区：IV層上面	壺	底部		推定 5.15		ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の粒、3mm以下の灰褐の粒	
179	土師器	BC区：IV層上面	壺	底部		推定 5.2		ナデ	ナデ	浅黄	淡黄	5mm以下の黒褐の粒、3mm以下のにぶい褐の粒	
180	土師器	BC区：IV層上面	壺	底部		推定 5.0		ナデ、ミガキ、指頭痕一部黒変	不定方向に工具による ナデ	淡黄橙	淡黄橙	4mm以下の黒色の粒、3mm以下の暗褐の粒、2mm以下の半透明の粒	
181	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部～底部	推定 7.45		推定 14.8	全体にミガキ、粗いナデ	横・斜方向にハケ目	淡黄 灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の光沢のある黒色の粒、3mm以下の茶褐色の粒	
182	土師器	BC区：IV層上面	壺	胴部～底部				ハケ目、ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	微細な無色透明の粒	
183	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				斜方向のハケ目	不定方向のハケ目	淡黄	浅黄橙	3mm以下の褐色、灰褐色、黒褐色の粒	
184	土師器	BC区：IV層上面	甕	口縁部				横・縦方向のハケ目	横・斜方向のハケ目	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の粒、微細な黒い粒	
185	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				横・斜方向のハケ目	横方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の粒	
186	土師器	BC区：IV層上面	甕	口縁部				ハケ目	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	1.5mm以下の褐色、赤褐色、黒色、無色透明の粒	
187	土師器	BC区：IV層上面	壺	口縁部				斜方向のハケ目	横方向のナデ、斜方向のハケ目	灰	にぶい黄橙	1mm以下の褐色、黒褐色の粒	

第７表　野添遺跡　出土土器察表(3)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	手面・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
188	土師器	B区：IV層上面	高杯	体部				ミガキ後ナデ	ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	3mm以下の灰白色の砂粒	
189	土師器	C区：IV層上面	高杯	坏部～脚部				ナデ、横方向のナデ	ミガキ	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の褐色、茶色、灰色の粒	
190	土師器	B区：IV層上面	高杯	脚部				ミガキ	ナデ	淡黄	黄灰 淡黄	5mm以下の褐色の粒	
191	土師器	B区：IV層上面	高杯	脚部				ナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	にぶい橙	灰黄 灰	2mm以下の淡黄色粒、微細な光沢粒	風化
192	土師器	B区：IV層上面	底杯	脚部～側部		推定 13.8		縦方向のミガキ	ナデ	淡黄	淡黄	雲母	
193	土師器	B区：IV層上面	高杯	裾部				横方向のナデ	ハケ目、横方向のナデ	黄橙	淡黄	2mmの茶褐色の砂粒	
194	土師器	B区：IV層上面	高杯	裾部				ミガキ、ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙	淡黄	細砂粒	
195	土師器	B区：IV層上面	高杯	裾部				ミガキ、不定方向のナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の白色、透明光沢粒、細砂粒	風化
196	土師器	B区：IV層上面	高杯	裾部				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の白色、透明光沢粒、細砂粒	風化
197	土師器	C区：IV層上C	小型上面	脚部～底部				ナデ、ミガキ	ナデ、横方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	微粒	
198	土師器	C区：IV層上面	甕	口縁部				横方向のナデ	工具による横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の茶褐色の砂粒、1.5mm以下の灰褐色の砂粒	
199	土師器	D区：IV層上面	甕	口縁部				横方向のナデ	工具による横方向のナデ、工具による縦方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶褐色、灰褐色の砂粒、無色透明の微細な砂粒	
200	土師器	D区：IV層上面	甕	口縁部				横方向のナデ	ナデ、工具による横方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm前後の灰褐色、茶褐色の粒	
201	土師器	SCT1	壺	胴部～底部				ヘラミガキ、スス付着	ナデ、スス付着	橙 浅黄橙	浅黄橙 灰黄	3mm大の乳白色の粒、1mm～8mm大の茶褐色の粒、0.5mm～5mm大の灰色の粒	
202	土師器	SG1	壺	底部		推定 6.8		ナデ、刺殖	ナデ、指頭痕	灰黄	にぶい黄橙	1mm～7mmの褐色の粒、1mm以下の黒色、灰白色の粒	
203	土師器	B区：I層	坏	口縁部～底部	推定 11.8			回転ナデ、ナデ	不定方向の工具による縦なナデ	橙 にぶい橙	にぶい橙 灰オリーブ	0.5mm～1mm大の灰褐、乳白色の砂粒	
204	土師器	D区：I層	坏	体部～底部		推定 7.8		回転ナデ、指頭痕、工具痕	回転ナデ	橙	橙	微細な透明光沢粒、1mm大の茶色粒	
205	土師器	C区：II層	坏	底部		推定 5.4		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	橙	橙	2mm以下の赤褐色、乳白色粒	
206	土師器	B区：II層	坏	体部～底部		推定 5.55		回転ナデ、ナデ	同転ナデ	橙	橙	2mm以下の反白、赤褐、淡黄色の粒	
207	土師器	SCY1	坏	体部～底部		推定 5.8		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	3mm以下の赤褐色、乳白色粒、0.5mm以下の黒色の粒	
208	土師器	SAK1	皿	底部		推定 6.95		ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	黄橙	1mm前後の茶褐色、黒褐色の粒	
209	土師器	D区：II層	坏	底部		推定 7.5		回転ナデ	ナデ	明赤褐	橙	1mm以下の灰白、赤褐、白色粒、微細な透明光沢粒	
210	土師器	C区：III層	坏	体部～底部		推定 6.4		ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	4.5mm以下の赤褐色の粒、2.5mm以下の褐色の粒	
211	土師器	D区：III層	高台付坏	体部～底部				回転ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒、1mm以下の淡黄、茶色粒	風化
212	土師器	SCT1	高台付坏	体部～底部				ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	1.5mm以下の白状で黒く光る粒、微細な褐色の粒	
213	土師器	B区：IIIB層	高台付坏	胴部～底部		推定 6.8		ナデ、風蝕	内黒	にぶい黄橙	灰	雲母	
214	土師器	SG1	高台付坏	底部		推定 6.8		ナデ、横方向のナデ	ナデ、内黒	にぶい黄橙	黒	1mm以下の褐色、黒褐色の粒	
215	土師器	B区：II層上面	鉢	口縁部～体部				粗いナデ	布目痕	にぶい橙	橙	2mm～4mmの橙、灰色の砂粒、5mm以上の灰褐色の小石	
216	土師器	B区：II層上面	鉢	口縁部				粗いナデ	布目痕	橙	橙	細砂粒	
217	土師器	D区：II層上面	鉢	口縁部				ナデ	布目痕	橙	橙 灰黄	5mm前後の黒褐色、灰褐色の粒	
218	土師器	D区：II層上面	鉢	口縁部～体部				ナデ	布目痕	明赤褐	明赤褐	4mm以下の黒褐色、乳白色の粒	
219	土師器	B区：II層上面	鉢	胴部				平行タタキ	平行ナデ風蝕	にぶい褐	にぶい褐	微細な淡黄、光沢粒	
220	土師器	D区：II層上面	鉢	胴部				平行タタキ	平行タタキ	暗灰黄	灰黄褐	きめ細かい、微粒	
221	土師器	D区：II層上面	鉢	胴部				格子目タタキ	同心円当て具	黄灰	灰黄	きめ細かい、微細な光沢粒	
222	土師器	D区：II層上面	鉢	胴部				タタキ	タタキ目をナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	きめ細かい、微粒	
223	土師器	D区：II層上面	鉢	胴部				ナデ	ナデ	灰褐	明褐灰	3mm以下の褐色の粒	
224	鉄製車	C区：IV層上面	鉄	鉄部						淡黄	にぶい橙	きめ細やか	
225	滑石	B区：II層上面	錘のつまみ					スス付着	スス付着	明褐灰 黒	明褐灰 黒	1mm以下の黒褐色、灰白色の粒、微細な金色光沢粒	
226	土師器	SDT1	坏	口縁部～底部	推定 12.4	7.2		回転ナデ、ナデ、糸切り底	回転ナデ	淡黄	淡黄	黒、白の微細粒	
227	土師器	SDT1	皿	口縁部～底部	推定 8.1	6.1		回転ナデ、ナデ、糸切り底	回転ナデ後指でナデ	淡黄橙 褐灰	淡黄橙 褐灰	黒、白の微細粒	
228	土師器	SDT1	皿	口縁部～底部	推定 7.9	推定 7.2		ナデ、糸切り底	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微粒	

第８表　野添遺跡　出土土器察表(4)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	口径 (cm)	底部 (cm)	器高 (cm)	手法・調整・文様など 外面	手法・調整・文様など 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
229	土師器	SDT1	皿	口縁部～底部	推定 8.0	推定 6.0		ナデ、糸切り底	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微粒	
230	土師器	SDT1	皿	口縁部～底部	推定 6.4	推定 6.2	推定 1.3	回転ナデ、糸切り底、ナデ	回転ナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒、2mmの乳白色粒1個 5mmの淡黄色粒1個	
231	土師器	SDT1	皿	口縁部～底部	推定 8.2	推定 6.6		横方向のナデ、ナデ、ヘラ切り底	ナデ、横方向のナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄、茶色粒、微細な透明光沢粒	
232	土師器	SDT2	皿	口縁部～底部	推定 14.4		推定 3.25	回転ナデ	回転ナデ	淡黄橙 灰黄	にぶい橙 灰黄橙	透明で光るガラス質の細片、0.5mm～2mmの灰、黒色の砂粒	
233	土師器	SCT1	小型土師	口縁部	推定 14.8			ミガキ、ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な灰色の粒	風化
234	土師器	SCT1	坏	口縁部	推定 13.8			回転ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	微細な光沢粒	
235	土師器	SCT1	坏	口縁部				回転ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細な灰色の粒	
236	土師器	BDC：IV層上面	坏	口縁部～底部	推定 13.0			回転ナデ後ナデ、ヘラ切り	回転ナデ後ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	微細な白色、赤褐の粒	風化
237	土師器	BDC：IV層上面	坏	口縁部～底部	推定 11.6	推定 8.2		回転ナデ	横方向のナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の淡黄、透明、黒色の粒	
238	土師器	BDC：IV層上面	坏	底部		推定 9.4		ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な光沢粒	
239	土師器	BDC：IV層上面	坏	底部		推定 7.7		ナデ	ナデ	灰黄	暗灰黄	1.5mm以下の橙色粒	
240	土師器	BDC：IV層上面	坏	体部～底部		推定 6.75		回転ナデ、ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白、赤褐色の粒	風化
241	土師器	BDC：IV層上面	皿	口縁部～底部	推定 9.1	推定 6.75	推定 1.75	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒	
242	土師器	CDC：IV層上面	皿	口縁部～底部	推定 8.6	推定 1.1	推定 8.15	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ、ナデ	淡黄	にぶい黄橙	細砂粒	
243	土師器	BDC：IV層上面	高台付坏	脚柱～底部		推定 7.2		回転ナデ	回転ナデ、ナデ	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	2mm以下の白色の粒、微細な黒色の粒	
244	青磁	CDC：II層上面		口縁部				釉	釉	暗青灰	灰	きめ細か、微粒	14～15C
245	青磁	CDC：II層上面						釉	釉	灰オリーブ	灰	精良	龍泉窯
246	青磁	CDC：II層上面		底部				釉	釉	灰白	灰白	きめ細か、微細	14～15C
247	白磁	BDC：II層上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
248	白磁	CDC：II層上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
249	白磁	CDC：II層上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
250	白磁	CDC：II層上面		底部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
251	白磁	CDC：II層上面		底部		推定 6.2		露胎	釉	灰白	灰白	精良	12C
252	青白磁	CDC：II層上面	合子	蓋				釉（刷毛状）	露胎	灰白	灰白	精良	12C

6　付.植物遺存体の取り上げ

これまで竪穴住居跡等の遺構を検出した際には土器・石器・鉄器等の遺物の取り上げは必須のこととして行ってきたが、その他の遺物の検出を目的とした覆土の水洗は行っていなかった。

近年、遺跡の調査研究において自然科学分野の導入が進展し、考古学的研究が新展開をみせている。各地の縄文遺跡の調査状況をみると、各種植物遺存体の検出に伴って大陸から渡来したものか自生していたものかを含めて植物栽培・農耕の論議が活発になっている。

今回、野添遺跡において縄文後期の竪穴住居跡を検出したことから試験的意味も含めて覆土水洗作業を実施した。水洗を行ったのはＪ１・Ｊ２・Ｊ３の３軒である。

その結果、予想外に多量の種子等を取り上げることができた。同時に、問題点も明らかになり今後の調査方法の課題について把握することができたのは大きな成果であった。

(1)　取り上げ

御池ボラ層に掘り込まれた竪穴住居跡の輪郭が判明した後、黒色の覆土を全て土嚢袋に納め水洗した。土嚢袋は数十袋にものぼった。水洗作業は通常フローテーション法によって行われるが、覆土に多く含む御池ボラも同様に浮くことから水をかけながら目の大きさの違う３種類の篩にかけ、黒い炭化物とみられるものを中心にピンセットで選別し取り上げた。水洗作業は発掘作業と併行しながら現場事務所前で発掘作業員が毎日交代で行ったが、真冬のため水道管が凍結する日も多く、氷の溶ける午前十時頃から午後四時までの厳しい作業となった。取り上げた炭化物は自然乾燥させ、ラベルを添付し収納した。

(2)　結　果

現場撤収後、埋蔵文化財センターにおいて炭化物の形状等の特徴をみながら選別作業を行った。最も多かったのは炭化樹木の細片であったが、意外だったのはクリ？の多さで、しかも殆どは殻はなく中の子葉だけが遺存しており理解に苦しむところである。また、植物種子とみられる楕円形の粒も多量に得ることができた。縦に割れているものでは子葉の様子も観察できるなど思った以上の結果に覆土の取り上げの重要性を再認識させられた。当初、種子様炭化物検出にあまり期待していなかったこともあって同定作業はできていないが、それは今後の課題として今回は炭化物の若干について計測表、拡大写真を掲載した。筆者らの観察では粒状のものはマメ類に近いものが多く、大粒のものはクリアではないかと考えているが、勿論詳細な同定が必要である。

(3)　課　題

試験的に行ったこともあり取り上げに幾つかの不備な点があげられる。第一点は取り上げ作業において覆土全量を一括したことである。平面・垂直分布が記録できるように住居跡にメッシュを切り、上部から下部まで埋没過程を明らかにしながら層位的に取り上げる必要がある。第二点は発掘作業員に袋詰め、ラベル記載等を任せ過ぎたために一部住居跡ごとの資料に混乱が生じているのではないかとの懸念を払拭できなかったことであり、第三点は水洗選別作業を作業員が毎日交代で行ったためと一定の基準を設けていなかったことにより取り上げ炭化物に偏りが生じた可能性があることなどである。その結果、多量の種子等の炭化物を得ることができたものの資料的価値において不確定な要素を多分に含むことになってしまった。これらの点については今後の調査において再検討し、さらに、資料の確実性を高めるため炭化種子個々の年代測定、同定作業に必要な標本資料の集成など行っていきたい。

第９表　野添遺跡縄文住居跡出土炭化種子一覧（参考資料）

1　採取数

住居番号	マメ様を含む小粒炭化物		クリ様炭化物		備考
	完形および復元できるもの	破損品（全形把握不可能）	片方残存（形状把握可能）	破損品（全形把握不可能）	
Ｊ１	２６	９	－	－	破損品の項には幾つかの割れているもの個々を一点として数えている
Ｊ２	１２３	４１９	８	２，８７３	
Ｊ３	５	２０	－	６３	
計	１５４	４４８	８	２，９３６	

2　計測表（任意に抽出した資料を計測したもの）

Ｊ１

番号	直径：mm	短径：mm	備考
1	6.04	4.24	Ⅰ類
2	5.15	3.27	
3	4.26	3.01	
4	4.43	3.57	
5	4.17	2.95	

Ｊ３

番号	直径：mm	短径：mm	備考
20	4.84	3.62	Ⅰ類
21	5.16	3.28	
22	3.68	2.98	
23	14.31	11.24	Ⅲ類

※この表は、取り上げおよび選別時に住居跡間の一部混乱のあった可能性があるため参考資料として提示するものである。

Ｊ２

番号	直径：mm	短径：mm	備考
6	4.45	3.50	Ⅰ類
7	5.62	3.50	
8	4.94	4.01	
9	5.71	3.87	
10	4.52	2.95	
11	3.89	3.49	
12	12.12	6.78	Ⅱ類
13	13.29	10.61	Ⅲ類
14	13.77	8.64	
15	19.32	17.15	
16	15.36	3.02	
17	17.29	14.04	
18	12.60	10.64	
19	17.30	13.60	

3　形状分布

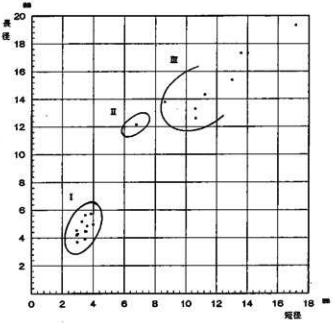
計測表に提示したＪ１・Ｊ２・Ｊ３の資料を合わせて長径および短径によって作成した形状分布状況である。

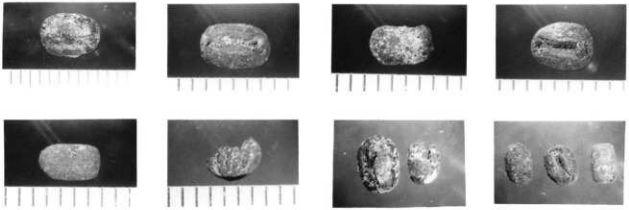
大きく３類に分けられる。Ⅰ類はマメ類を含む一群、Ⅱ類はマメ様であるが大きさにおいてⅠ類と大きな差があるもの、Ⅲ類はクリ様のものである。

Ⅰ類；マメ類？ほか（小）

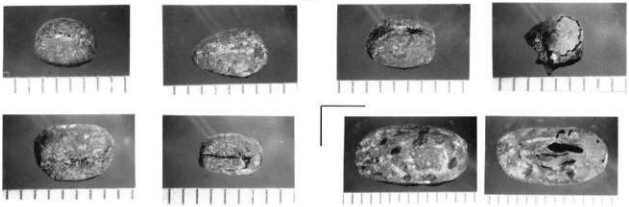
Ⅱ類；マメ類？ほか（大）

Ⅲ類；クリ？

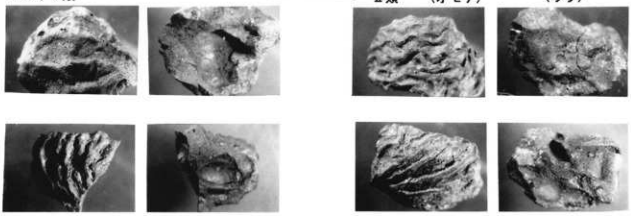




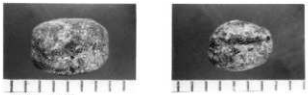
Ｊ１：Ⅰ類



Ｊ２：Ⅰ類　　Ⅱ類　（オモテ）　（ウラ）



（オモテ）　（ウラ）　Ⅲ類　（オモテ）　（ウラ）



※目盛りはmm

Ｊ３：Ⅰ類

縄文住居跡出土炭化種子顕微鏡写真

第4節　総　括

野添遺跡は、縄文時代後・晩期、古墳時代、古代、中世、近世にまたがる複合遺跡で、縄文時代後期に最盛期があったと考えられる。

調査の結果、主な遺構として、Ⅱ層から土壙墓２基、土坑２基、溝状遺構２条、道路状遺構２条、Ⅳ層からは、竪穴住居跡９軒、土壙墓１基、土坑１基が確認され、遺物では縄文時代後・晩期の土器、古墳時代から近世にかけての土師器、須恵器、布痕土器、陶磁器等が出土している。石器では石鏃、剥片、石斧、磨石、敲石などがある。今回の調査の成果を総括してみたい。

1　縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構として、Ａ・Ｂ・Ｃ区から竪穴住居跡７軒・土坑１基が確認された。出土の土器から後期後葉の住居と考えられる。住居跡はとくにＣ区に集中しており、当時の集落はＣ区のなだらかな平地面に中規模の集落があったと推察される。住居形態は７軒ともほぼ同様で、直径３～５ｍの円形プランを呈している。縄文時代の円形竪穴住居の編年的位置については、住居内出土土器から考察すると、肩部に凹点文を施す中岳Ⅱ式相当の深鉢土器が決め手となる。河口貞徳氏によって調査された中岳洞穴出土土器の一群は中岳Ⅱ式と命名され、西平式土器から三万田式土器への移行過程のものとして位置づけられている。その後、中岳Ⅱ式土器が中村遺跡（宮崎県北諸県郡山田町）や平畑遺跡（宮崎県学園都市遺跡群）、王子原遺跡（宮崎県都城市安久町）から出土し、日高孝治氏・北郷泰道氏・菅付和樹氏によると、後期末から晩期前葉に位置づけされ、さらに薬畑光博氏は土器の形態や文様等、細部にわたる再検討をし三万田式と御領式土器に併行する可能性が強いとしている。現状では縄文後期後葉から晩期の間に位置づけられると考えられる。住居内からは炭化物粒は確認されたが硬化面や焼土等は確認できなかった。これらは一部で時期差が想定されるもののほとんどが同時期であると考えられ、とくにＣ区では地形に沿って３～４ｍ間隔で住居が点在していた様子が窺える。また、１・２・３号住居跡の埋土を水洗いした結果、植物種子とみられる楕円形の炭化物を多量に得ることができた。粒状のものはマメ類に近いものが多く、大粒のものはクリではないかとみられる。松山遺跡（宮崎県えびの市）においても遺物包含層から約30個の炭化クリが検出されており、縄文時代後期では松山遺跡についで県内で２例目の出土となる。４号住居跡からは玉が検出されており、学頭遺跡（宮崎県東諸県郡高岡町）出土菅玉に類似している。また、３号住居跡からは磨製石斧、敲石、打製石斧が検出された。土坑については、形状は不整形プランで断面は椀状を呈する。中岳Ⅱ式土器を出土しており、住居跡群と同じ頃形成されたものと考えられる。

今回の調査で出土した縄文土器のうち、ほぼ全体を占めるものは深鉢の凹線文系の土器群である。この土器群の中心は縄文後期後葉から晩期前葉に位置づけられている中岳Ⅱ式である。その他、二平行沈線をもつ「指宿式」の要素をもつものや貝殻文系の土器である「市来系」（58）のものや、組織痕土器が一部みられる。「中岳Ⅱ式」の要素をもつ土器は（１～７、９～13、18～21、24～26、29～32、35～39、44～46、48～51、66、72～73、75、77～81、91、96、98）である。特徴は、器壁が厚く、口縁部が肥厚し、胴部が膨らむもので、口縁部や胴部屈曲部に二条の凹線文や凹点文が施されている。外器面は口辺部が横方向に、胴部以下が縦方向に研磨されているが、ススが付着しており、煮沸容器として使用

されたものと思われる。「指宿式」の要素をもつ土器は（56～57、60～61、70～71、84、94～95、99～100）である。特徴は、頸部がくびれ、胴部には先端が入組繋ぎ文になっている２本１組の沈線による曲線的なモチーフなどが抽出されている。また、縄文晩期前半にみられる組織痕土器（68・88・103・104）は、土器の表面に布などの痕跡がみられる。器形は浅鉢型土器の一種でボール状の丸底を呈する。

2　古墳時代の遺構と遺物について

都城盆地の古墳は北部に集中しており、南部にはない。志布志に抜けるルートとして立地条件上大切な箇所だったと思われる。恐らくは前方後円墳体制に組み込まれない在地系豪族の独自の葬送儀礼をもっていたと思われる。都城盆地は後に諸県郡という行政区に入るのであるが、その行政区の長に治まったのが国富町に古墳群を築いた集団かもしくは都城北部に古墳群を築いた集団と思われる。「記紀」によると諸県君である。都城盆地の古墳の集落は梅北川周辺にあると思われ、野添遺跡も同じ集落のネットワークに組み込まれる範囲にあったかも知れない。

古墳時代の野添遺跡は竪穴住居跡３軒、土壙墓１基から検出されている。住居跡の形態は３軒ともほぼ同様で方形プランを呈する。住居跡の埋土は褐色土に御池ボラ混じりの土で床面に近づくにしたがってボラの含有率が多くなる。１号住居跡は埋土中に全体的に炭化物が含まれていた。１号住居跡の残りはよく、主柱穴は方形配置の４基である。住居跡の時期であるが、口縁部が内湾気味に立ち上がり、貼付刻目突帯を施す甕型土器も出土していることから古墳時代の５世紀から６世紀頃に位置づけられる。ＳＡ１２・ＳＡ１３は検出面の深さが４cm～13cmで浅く、遺物は小片で少量なので埋土の状況から古墳時代の遺構として捉えた。３号土壙墓は、７号竪穴住居跡と切り合っている。埋土の状況は１号・２号・３号住居跡と同じで遺構内出土土器をみても、貼付刻目突帯をもつ甕、小型丸底壺などから古墳時代５世紀～６世紀頃に形成されたものと考えられる。遺物は全て土師器で甕・壺・高坏で作りも丁寧で、供献土器の印象が強い。また土壙墓内から蛇紋岩製の勾玉（産地は不明）も検出された。

3　古代及び中・近世の遺構と遺物について

古代については遺構の確認はできず、遺物が少量ながら出土している。布痕土器等が出土していることから10世紀頃と考えられる。

中世から近世の遺物は、遺物包含層のほとんどが耕作により削平されているため少なく、遺構に伴うものも僅かであるが、若干の出土遺物と埋土中の火山灰の状況から遺構の時期の位置づけを行った。検出された遺構は、土壙墓２基、土坑２基、溝状遺構２条、道路状遺構１条である。遺物は中世に属するものであったので、遺構もおおむね中世の所産と考えられるが、溝状遺構・道路状遺構については埋土の状況から近世のものと判断した。

本遺跡Ｃ区の２号土壙墓からは埋納された土師器坏と小皿が３号土壙墓からは小皿が出土した。両遺構からは上面が耕作の影響でカットされていたものの、遺構内堆積土は基本土層Ⅱ層の下位の土層と判断されるもので、２つの遺構はほぼ同時期と考えられる。Ⅱ層は桜島文明軽石（15世紀後半）を含むものである。本遺構の中には、陶磁器など時期比定の手がかりとなる遺物は含まれていなかったので、土師器の坏と小皿について、古代末以降、桜島文明軽石までの都城盆地における土師器の編年（柴畑光博氏：都城盆地における古代末～中世前期の土師器編年試案）から２号・３号土壙墓の埋納時期を推定す

る。野添遺跡の２号・３号土壙墓の出土は時期をみると、２号土壙墓の土師器は底部切り離しがヘラ切り１点に対し、糸切り４点という組成である。口径は小皿が6.4～8.2cmで、坏が12.4cmという具合に小皿に多少のバラツキがあるが、小皿が８cmを少し越えるぐらいで、坏が12cmを少し越えるくらいという傾向は看て取れる。３号土壙墓の土師器は小皿の口径が14.4cmとなり大きめとなる。これらの特徴から２号・３号土壙墓の土師器の編年は田谷・尻枝ＳＣ26段階に該当すると思われる。２号土壙墓の小皿については、口径が大きく正坂原ＳＣ０１段階に相当するものであるが埋土の状況から２号土壙墓と同時期のものとして捉えた。時期は13世紀中頃から14世紀初頭にかけての所産ではないかと思われる。都城においてこの段階に含めて考えられるのが、平峰遺跡の大溝ＳＤ０１、久玉遺跡３次調査Ａ地区４号溝、同遺跡１次調査Ｄ地区ＳＤ１６出土資料である。また、２号・３号土壙墓はＣ区のなだらかな平面地に位置しており周囲には建物遺構等の存在が認められなかったことから祭祀的な土師器埋納遺構と考えられるのではないだろうか。

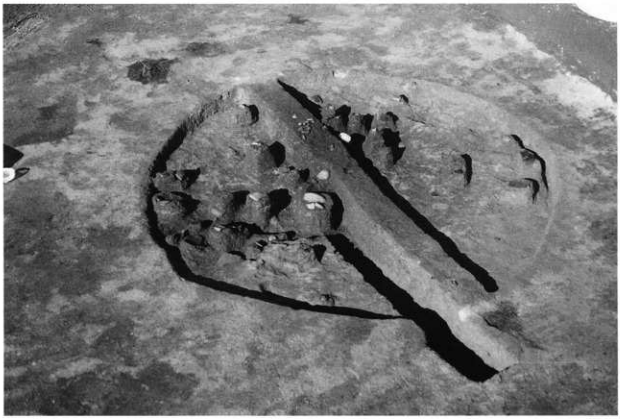
Ｂ区中央部で検出された１号・２号溝状遺構は北西方向に並列して走行している。出土遺物は確認されていない。遺構埋土の状況から近世の遺構として捉えたが、他に同時期の遺構は確認されていない。溝は地形に沿うものではなく、排水だけの機能をもつものではないように思われる。両溝とも部分的に硬化面が確認されることから「道」としての機能も推測される。

Ｃ区南端部で検出された道路状遺構は、北東から南西に走行する。道路の幅は検出面で約２ｍで、当時はさらに幅広であったことがうかがえ、断面をみると硬化層が２層観察され、２時期にわたって使用されたものと推定される。硬化層の中に15世紀後半に降下したとされる文明白ボラが混在していることから中世以降から近世にかけてのものと推測される。出土遺物が古墳時代の甕、古代のものと思われる高台付き埦などで流れ込みの遺物であると思われる。そのために時期決定には説得力に欠ける。

遺物包含層のほとんどが耕作により削平されていたため、中・近世の遺物の出土量は少なかった。遺物は、土師器７点、須恵器１点、白磁・青磁・青白磁などの陶磁器が９点出土している。土師器（236～242）、須恵器（243）等については、出土点数が少ないため時期については不明である。白磁碗（247～251）は、大宰府分類白磁碗Ⅳ類に分類され、大宰府Ｃ期の11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。青白磁碗（252）も同時期と思われる。青磁碗（245）は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱｃ類？が出土しており、大宰府Ｆ期の13世紀中頃～14世紀初頭前後と考えられる。また他の青磁碗（244・146）は、14世紀後半～15世紀前後のものと推察される。

＜参考・引用文献＞（敬称略）

「宮崎県史　資料編　考古１」宮崎県史刊行会
「宮崎県史　通史編　原始・古代１」宮崎県史刊行会
「宮崎県史　通史編　原始・古代２」宮崎県史刊行会
「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集　2001
「ワクド石遺跡」『熊本県文化財調査報告』第144集　1994
「梅木原遺跡」『小林市文化財調査報告書』第11集　2000
「都之城跡・久玉遺跡・宮ノ下遺跡・堂山（南地区）遺跡・牟田ノ上遺跡・屏風谷第１遺跡」
『都城市文化財調査報告書』第13集　1991
「大岩田村ノ前遺跡」『都城市文化財調査報告書』第14集　1991
「天神原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第23集　1993
「久玉遺跡第５次・油田遺跡・正坂原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第25集　1993
「柳山・郡元地区遺跡」宮崎県教育委員会　1992
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討　－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古第31号』1997
水ノ江和同「北部九州の縄文後・晩期土器　－三万田式から刻目突帯土器の直前まで－」
『縄文時代８』縄文時代研究会　1997
金丸武司「宮崎県における縁帯文成立期以前の土器について」宮崎縄文研究会　1997
「横市地区遺跡群　肱穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡（第１次）」
『都城市文化財調査報告書』第50集　2000
「上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集　2001
「母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集　2002
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）『都城市文化財調査報告書』第５集　1986
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）『都城市文化財調査報告書』第６集　1987
「梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・義原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第42集　2001
戸高充則編「縄文時代研究辞典」東京堂出版　1994
「源藤遺跡」宮崎市教育委員会　1987
「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会　1988
「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　1985
「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会　1988
太宰府市教育委員会200『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類－』太宰府市の文化財第49集



１号竪穴住居跡（ＳＡＪ１）検出状況

２号竪穴住居跡（ＳＡＪ２）検出状況

３号竪穴住居跡（ＳＡＪ３）検出状況

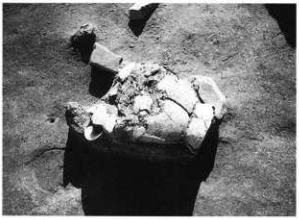
７号竪穴住居跡（ＳＡＪ７）・２号竪穴住居跡（ＳＡＫ２）・１号土壙墓（ＳＤＫ１）完掘状況

１号土壙墓（ＳＤＫ１）検出状況

１号土壙墓（ＳＤＴ１）検出状況

１号竪穴住居跡（ＳＡＫ１）完掘状況

１号土壙墓（ＳＤＴ１）土器検出状況

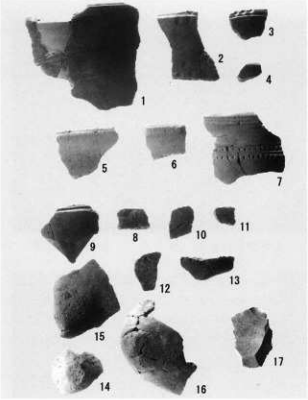


１号竪穴住居跡（ＳＡＫ１）土器検出状況

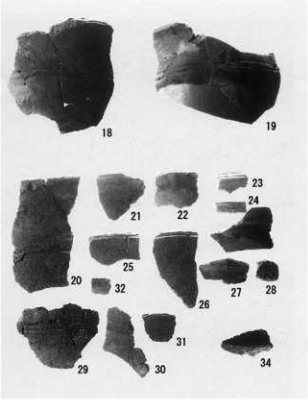
２号土坑（ＳＣＴ２）完掘状況

２号土壙墓（ＳＤＴ２）完掘状況

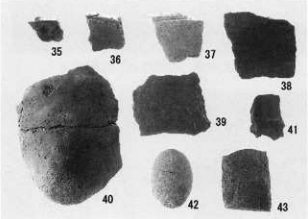
１号道路状遺構完掘状況
（ＳＧ１）



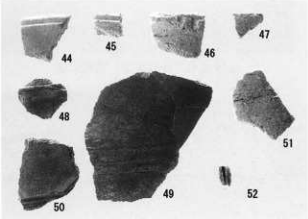
Ｊ１号竪穴住居跡出土遺物



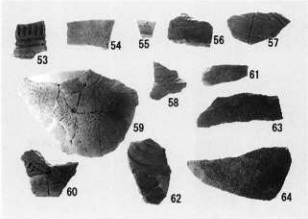
Ｊ２号竪穴住居跡出土遺物



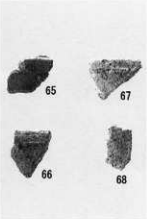
Ｊ３号竪穴住居跡出土遺物



Ｊ４号竪穴住居跡出土遺物

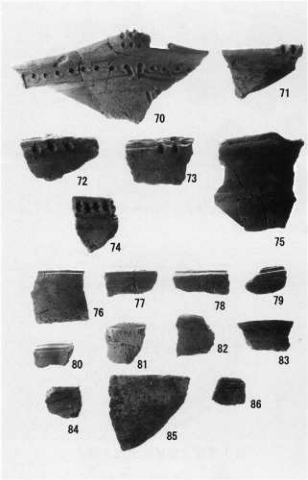


Ｊ５号竪穴住居跡出土遺物

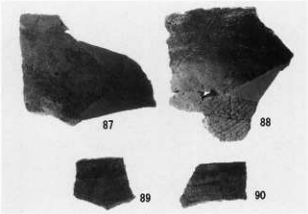


Ｊ７号竪穴住居跡出土遺物

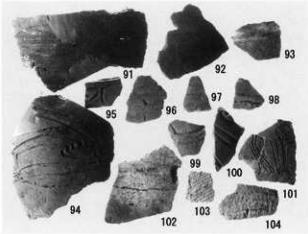
Ｊ１号土坑出土遺物



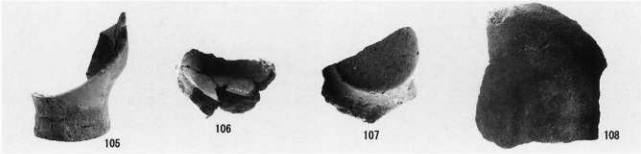
野添遺跡出土縄文土器(1)



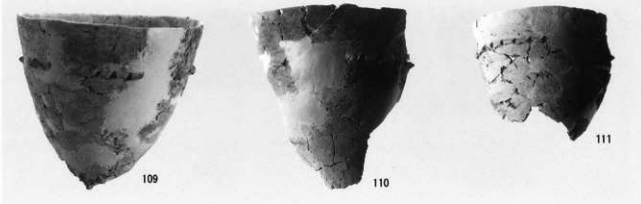
野添遺跡出土縄文土器(2)



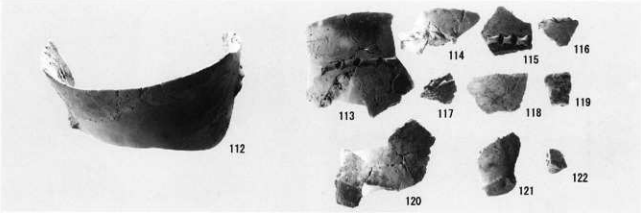
野添遺跡出土縄文土器(3)



野添遺跡出土縄文土器(4)



Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(1)



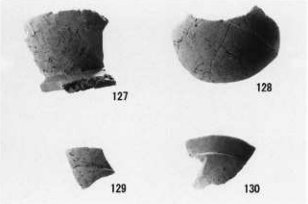
Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(2)

Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(3)

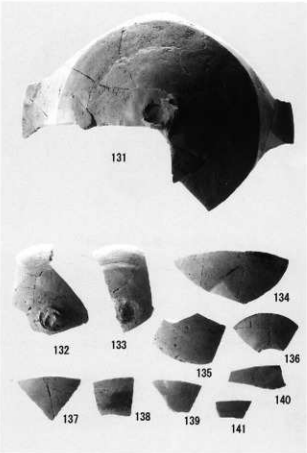
Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(4)

Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(5)

Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(6)



Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(7)

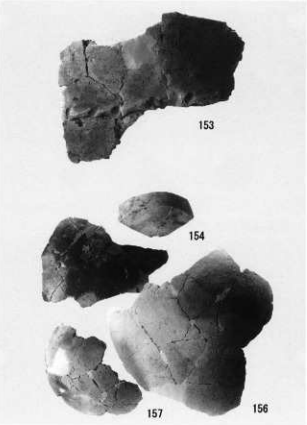


Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(8)

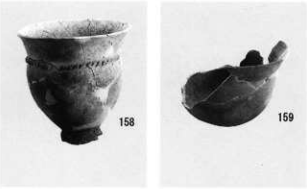
Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(9)

Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(10)

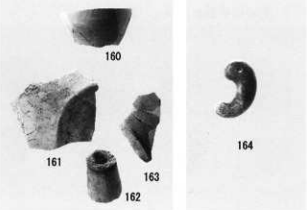
Ｋ１号竪穴住居跡出土土器(11)



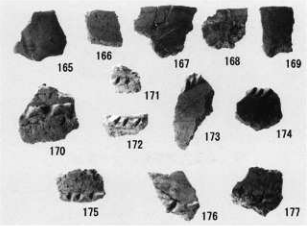
Ｋ１号土壙墓出土遺物(1)



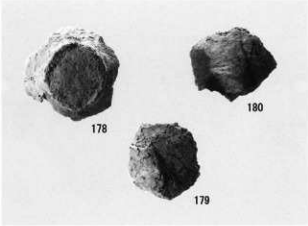
Ｋ１号土壙墓出土遺物(2)　Ｋ１号土壙墓出土遺物(3)



Ｋ１号土壙墓出土遺物(4)　Ｋ１号土壙墓出土遺物(5)

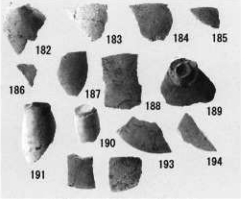


野添遺跡出土土器１（古墳時代）

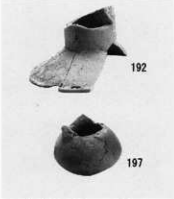


野添遺跡出土土器２（古墳時代）

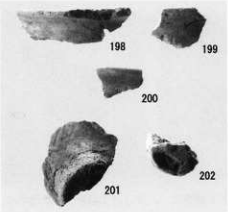
野添遺跡出土土器３（古墳時代）



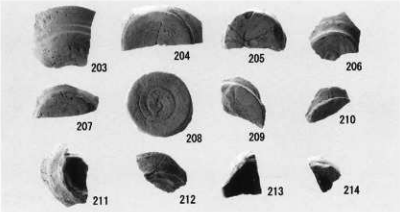
野添遺跡出土土器４（古墳時代）



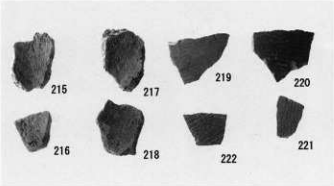
野添遺跡出土土器５（古墳時代）



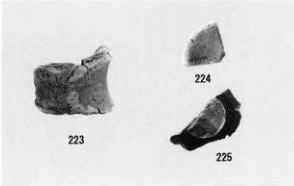
野添遺跡出土土器１（古代）



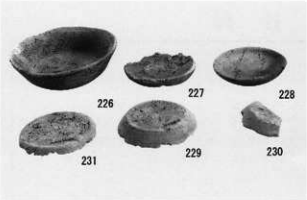
野添遺跡出土土器２（古代）



野添遺跡出土土器３（古代）



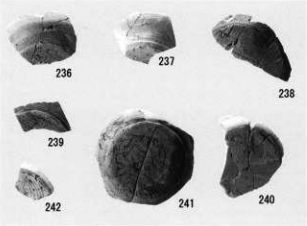
野添遺跡出土土器４（古代）



Ｔ１号土壙墓出土土器

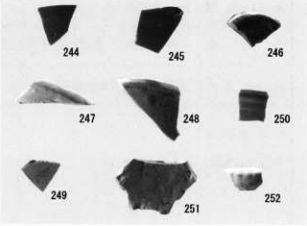
Ｔ２号土壙墓出土土器

Ｔ１号土坑出土土器

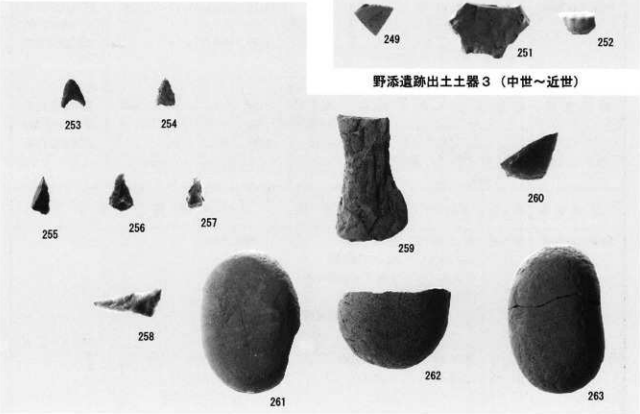


野添遺跡出土土器１（中世～近世）

野添遺跡出土土器２（中世～近世）



野添遺跡出土土器３（中世～近世）



野添遺跡出土石器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とよみつおおたに　のぞえ
書　　名	豊満大谷遺跡　　野添遺跡
副　書　名	農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第4集
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第83集
編集担当者名	玉利　勇二
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒880－0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地　℡ 0985－36－1171
発行年月日	西暦　2004年1月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所　在　地		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
豊満大谷遺跡	都城市豊満町字大谷		31度 41分 25秒	131度 5分 59秒	2001. 9.17 ～ 2002.10. 9	1,100	農用地整備事業「都城区域」農業道路建設
	コード						
	市町村	遺跡番号					
	45202	－					
野添遺跡	都城市安久町字前畑		31度 41分 42秒	131度 5分 42秒	2001.11.13 ～ 2002. 2.15	1,500	農用地整備事業「都城区域」農業道路建設
	コード						
	市町村	遺跡番号					
	45202	－					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊満大谷遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代～中世 近世～近代	竪穴住居跡　1 掘立柱建物跡　1 土杭7・石囲い炉　1 集石状遺構　1 溝状1・畝状遺構　8 道路状遺構　3	縄文土器 石器 土師器 須恵器 布底土器	
野添遺跡	散布地 集落	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴住居跡　9 土壙墓　3 土杭　3 溝状遺構　1 道路状遺構　2	縄文土器（後・晩期） 土師器・須恵器 布底土器・陶磁器 石器・勾玉・玉	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第83集

豊満大谷遺跡　野添遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004年１月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880－0212　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
ＴＥＬ　0985－36－1171　　ＦＡＸ　0985－72－0660

印　刷　合資会社　愛文社印刷所
〒880－0852　宮崎県宮崎市高洲町222番地
ＴＥＬ　0985－28－8111